
CHAOS ~ REMEMBERS ~

日向 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CHAOS（REMEMBERS）

【Nコード】

N7024V

【作者名】

日向 剛

【あらすじ】

注、『CHAOS』の続編です

龍との戦いから2年、地上、地下両世界が復興し、瑠奈達能力者も役目を終え、再び散り散りになった。だが、とある”疑問”が、さらなる災厄を巻き起こす…

新キャラ紹介？

「久しぶりだな、読者の皆。俺がこの物語の一応主人公、烈火瑠奈だ。龍との戦いから2年が経ち、地上、地下ともに復興が進んでいる。俺以外の仲間も復興への援助へ出回っていたが、ようやく一息つけるようになった。…でも、やっぱり平和は長くは続かない。…なんでかって？それは作品の中でいずれ語られるだろう。俺もそれに気付いた頃から物語が始まる。前回で終わったかと思っていた”神”対”人”の戦いがまた始まる…」

物語の登場人物、特徴（一話登場キャラのみ。2話以降登場キャラは随時紹介予定）

烈火 瑠奈：22歳、男”炎”と”闇”の守護者。通り名は”憤怒の炎”。この物語の主人公。刀に炎をまわせ突撃が戦い方。前作から頭に巻いてたバンダナを今は墓に置いている。地下能力者ランクは”零”（能力者ランクは話中に説明予定）

光 瑠璃：21歳、女
世界で数が少ない”愛”の守護者。通り名は”愛の巫女”。前作同様メインヒロイン。一応刀を扱えるが、メインは光の魔法。髪を止めていたりポンを今は墓に置いている。能力者ランクは”零”。

灼沢 紗菜：20歳、女
瑠奈と同じく”炎”の守護者。刀でぶつたぎるスタイル。最近はおしゃれを気にして、ストリートを束ね、自称”ワンテール”をしている。ブラコンの気あり。能力者ランクは”参”

夢村 未来：25歳、女
極めて稀な異端能力、”夢”の守護者。重山飛鳥の亡き後、メンバ

ーの中でお姉さんの存在。爆弾などを駆使して戦う。最近の悩みは美容の維持らしい。能力者ランクは”弐”

風野 真人：22歳、男

”風”の守護者。通り名は”裏切りの風”。拳で語る見た目にそぐわぬ熱い男。瑠奈と瑠璃の近づききらない関係に苛立ちを感じている。能力者ランクは”壹”

有音 渚：21歳、女

夢村同様極めて稀な異端能力者。”音”の守護者。装備は愛用のギターを腕に装着し、音波での精神攻撃が得意。最近新しいギターを買いお金がなくて困っている。能力者ランクは”参”

重山 雫：19歳、女（初登場）

龍との決戦で死亡した重山飛鳥の妹。世界に二人居るか居ないかとされる異端能力。”重力”の守護者。見た目は重山飛鳥にそっくり。瑠奈を目の敵にしている。シスコン。能力者ランクは未登録。

第1幕1話：始まりが迫る日常

〓新組織、道場〓

昼の道場。そこには男と女が一人ずつ、木刀をもって打ち合っていた

「たあああつっ！」

「…甘いつっ！」

男：瑠奈の一撃が、女：灼沢の脇腹を捉える。灼沢はよろめきながら
らも、すぐに体勢を建て直し、再び突っ込む

「そこだあああつっ！」

灼沢は瑠奈の頭上から斬りかかろうとするが、瑠奈はその手が読め
ていて、瑠奈はあっさり灼沢の木刀を自分の木刀で受け止める

「！！ぐうっ…！」

「悪いな紗菜…。俺は、手加減が出来なくてなあつっ！」

そしてそのまま灼沢を床に叩きつけ、喉に木刀を突きつける

「…っつっ！」

「俺の勝ちだ。分かったら？まだ俺には敵わねえって…！」

「も…もう一回…！」

灼沢は息を荒くさせながらもまた木刀を取る。だがあきれた瑠奈は
その刀を払い除けた。その行為に驚きを隠せない灼沢は瑠奈に掴み
かかる

「ち…ちよつと！まだ余裕あるんでしょ！？もつと稽古付き合っ
てよ！」

「…お前なあ、数をこなせば良いってモンじゃないだろ？悪いが、
これ以上無理をさせてまで稽古する気はない」

「わ、私は無理なんて…！」

「バーカ。お前のその服を見てたら無理してるのがバレバレだ」

「……!!」

灼沢は白いTシャツ一枚で瑠奈と稽古をしていたが、そのシャツが血で赤く滲んでいたのだ。それを見た瑠奈は灼沢に無理をさせたくなく、中止を持ち出したのだ。だが、それでも灼沢は諦めず瑠奈に払われた木刀を取りに行こうとする。それにさらに呆れを見せた瑠奈は灼沢を羽交い締めにし、灼沢の動きを封じた

「は、離せえっ！まだやるのーっ！」

「ワガママを言うな、これで身体を壊したら元も子も無いだろうがっ！」

「あらあら、何をしてるの、紗菜ちゃんに瑠奈君？」

その道場に夢村が現れた。瑠奈はその姿を確認するや否や

「悪い夢村！その木刀をちよつとどっかにしまっつけてくれないか!？」と頼む。夢村はニコツと笑い、状況を察したようで木刀を室外に持っていった

「ぶ〜…どうして皆止めるのさ…」

「当たり前だ。最近のお前は随分と熱心なのはいいが、だからといって怪我をしてまでやることじゃねえだろ？」

「そ、そりゃあ…そうだけど…」

「確かに、一週間後に試験があるとなれば、焦るのは分かるがな？」龍を撃退後、地下世界は瑠璃が統治することになった。そして地下のこれからの統治の仕方を考え、有能な能力者を新組織に入れる為、模擬戦を行いその力を計る制度を作り出した。その能力者ランクは6段階に分けられ、零、壹、貳、参、四、五の六段階になる。そして新組織に入れるのは参の人間までである

「定員がないんだ、それにお前は参くらいの実力はあるだろ？」

「わ、分かんないよ…こうしてお兄ちゃんと戦っても、まだ一太刀も入れてないし…」

「まあ、見るのは土屋だからな。厳しいことに違いは無いな」

落ち込む灼沢に余裕の烈火。二人の”炎”の能力者は明暗が分かっていた。そこに夢村と瑠璃もくる

「あら、紗菜ちゃん、諦めたのかしら？」

「おはようございます、瑠奈さん、灼沢さん」

「ああ、おはよ…って、もう12時回ってるぞ…」

「てへへ…少し寝過ぎちゃいました」

「新組織部隊編成模擬戦三日前なのに、代表は緊張感は全くないわね…」

「夢村の言う通りだ。…お前は選ばる奴に守られるんだ、少しは緊張しとけ？」

その瑠奈に瑠璃は満面の笑みで

「大丈夫です その時はプライベートで瑠奈さんに守ってもらえれば」

「…ったく…。まあ、肩に力が入ってないのは関心だがな…」

「私たち以外にも零さん、天鳳院さん、聖澤さん、風野さん、有音さん、明源さんは呼ばれてるみたいですね？」

瑠璃はポケットに閉まっていた模擬戦出場者リストを取りだし、それを眺めていた

「…ただ、天導さん、日向さん、泉野さんは呼ばれてないみたいですね…」

「仕方ないだろ、あれから天導は消息不明、日向、泉野は元はといえば巻き込まれた人間だからな」

「…そうなんですかねえ…」瑠璃は不満の色を浮かべていたが、瑠奈は気にする気は無かった。だがこの「天導が消息不明」と言う事が既に事件の始まりだとは今は知るよしもなかった…。そして3日後…

Ⅱ 新組織、闘技場Ⅱ

「…では、集まったようだな、諸君！」

土屋が沢山居る能力者の先陣に立ち、指示を出す

「戦いは1対1のサシ勝負、勝ち負けの他に力の使い方、戦い方等も選考基準に入るからな、諸君、気張っていけよ！」

「…相手はクジで決まる、か…」

この1対1の戦いのカードはクジで決まるようで、瑠奈も既にクジを引いていた。クジには”1”と書かれていたため、瑠奈は一番始めの対戦となるようだ

「…さて、誰が来るのやら…」

瑠奈は刀を持ち、闘技場の舞台の上にあがる。そして…対岸に上がったのは…

「」

「！？…お前は…」

「両者、構え。…始めっ！」

2話：試験開始・烈火 瑠奈対重山 零

「新組織・闘技場」

「では、両者前へ」

「…ふう…」

瑠奈達は能力者の格付けを行う模擬戦をすることになり、第一回戦に出場することになった。そして相手は…

「…初めまして、かな…。お前に会いたかった」

「…いつ!?!」

瑠奈は驚愕を隠せなかった。対戦相手が…龍の戦いで死んだはずの重山飛鳥にそっくりだったからだ。それに相手の名は…

「私の名前は重山…重山零だ」

「なっ!?!?」

飛鳥と同じ名字、似ている容姿…唯一違うところといえば、身長くらいだろうか。容姿端麗、そして構え…似すぎていた。それが瑠奈に取って大きな足枷となる

「…まさか…飛鳥の、妹…?」

「ふん、バカじゃないらしいな。その通りだ」

「では、試合、始め!」

そして土屋の号令の元、戦いが始まった。はじめは互いに舌戦となる
「まさかこんなところで…それに、妹が居た事実なんか知らねえぞ!」
「?」

「当然だ。姉は私の存在を他人に言わなかった。そして私もスラムに自ら身を潜めた。分かるはずもあるまい」

「分からねえな、何故隠さなきゃいけなかったか…、そして、何故今更こんなところに!?!」

「復讐だ」

その一言を重山がいい放つと、重山は姿を消した。重山が居た場所

には地面がめり込んでいた。それを見た瑠奈は焦りを募らせる

「…ちっ、いきなり消えんのかよ！」

「ここだ」

瑠奈は声のした方を向けると、重山は既に拳を振りかざし、自分の場所に落下してきていた。それを見た瑠奈は忽ち防御体制を取るが…

「真つ当な判断。だがそれも…私が押し潰す！」 G・F”（ジオフイスト）！」

重山の拳は瑠奈の剣ごと地面に叩きつけた。瑠奈は防御しきれず剣は弾かれ、自分自身は壁に叩きつけられる

「…拳が…重い！」

「私の拳は普通ではない。姉とは違う力だが…それでも姉と同等の力を出せる！」

瑠奈はさらに攻め来る重山の攻撃をなんとかかわしながら、反撃の糸口をつかもうとするが刀はあらぬ方向に吹き飛ばされ、重山の連撃もあり攻勢には転じれなかった

(…: どういうことだ、この拳の重さ、飛鳥の”無”の力のような強化の力じゃない。だとすると…:)

「隙有り」

「!?!?しまっ…」

「”重砕撃”」

「ぐあっ!!!」

一瞬判断が遅れた瑠奈は、重山のストレートを腹に受け、地面に叩き伏せられる。瑠奈の顔面からは血が流れ落ち、吐血も止まらない、もしかしたら肋骨を二三本折られたらどうか

(…: 落ち着け、相手は飛鳥の妹、何か糸口はある。何か…:)

だがそこに重山の手が伸び、瑠奈の髪の毛を掴み、引っ張りあげる

「…っっ!!!」

「…: 私は、姉を殺したお前を許さない。姉の様に手加減は出来ないが、それも慈悲だ！」

そしてそのまま地面に叩きつける。その行為を何度も行い、瑠奈は

さらに流血を重ねる。見かねた土屋が試合を止めようとするが…

「見ちゃおれん。そこま…」

「待ちなさい、土屋」

その声を止めたのは瑠璃だった。その瞳は瑠奈を信じてる目だった

「瑠奈さんはまだ動けます」

「だ、だが…」

「あの人がこんな簡単にやられるくらいなら、今世界は破滅してま
す。…もう少し待ちましょう」

重山は何度も瑠奈を地面に叩きつけたあと、壁に瑠奈を叩きつけ、
少々距離を取る。その間に何かの力を拳に込めていた

「…くっ…」

「所詮この程度…道理で姉は死ぬわけだ」

「…」

瑠奈は答えない。ただ目をつむり、諦めたように佇んでいる。それ
を見た重山は少し笑い

「だが、今ここでお前が死ねば、姉の仇が討てる。…私の力、それ
は”重力”だ」

「…重、力…」

瑠奈が辛うじて目を開ける。だがその目に沢山の血が入り、まとも
に見えては居なかった

「この力を自在に操り、私の拳に力を与える。…姉のとは違い力を
制御するのは難しいが、慣れれば”無”以上の力を期待できるのだ」

「…道理で、拳が…重い訳だ…」

すると瑠奈はゆらゆら立ち直し、刀を抜く構えを取る。だが瑠奈自
身は刀を今持っていない。一体何をしようとしているのか…。その
行為が頭に來たらしく、重山が突っ掛ける

「何をしたいか知らないが、これで終わりだ、烈火あああっ！」 圧
壊撃”！！”

「…悪いな、粟とやら…」

突っ込んでくる重山に対し、瑠奈はまだ刀を抜く構え。そして重山

が間合いに入った瞬間だった

「烈火流剣術：”炎飲斬”（ほむらいんざん）！！」

烈火が重山の隣を居合い抜きの様子に通過すると、重山の前方から炎で包み込み、爆破したのだった。重山は一瞬の打ちに打ち上げられる

「がはっ…！？」

「飛鳥の戦い方は電車道の様に真っ直ぐだ。だったらちよつと軸をずらせば簡単にかわせる。…お前はそれが顕著だ」

「…まず…いつ」

重山は空中に居るため、体勢を整えられない。さらにその上方に瑠奈が飛び上がる。手には刀、そして力を解放し…

「悪いな雫。お前は甘すぎる。”崩壊花火”！！」

瑠奈の刀が重山に触れた瞬間大爆発を引き起こした。そして煙が晴れると、立ち上がったのは瑠奈だった…

「し、勝者…烈火、瑠奈」

「…ガキが。飛鳥ならあのとき真っ正面から来ないっての」
そして額の血をぬぐいながらその場を瑠奈は去っていった…

3話…絆対血縁。やるせない思い

「新組織」

「つが…は…」

瑠奈は血を流しよるめきながら会場を後にした。重山との戦いで深手を負ってしまったのだ

「…さすがは…重山の妹か、少し甘く…見てた…」

「…だろうな…！」

だがそこにさつき倒した筈の重山が仁王立ちしていた。だが服は焦げつき、額からは血が滴り落ちている

「…お前…！」

「私は…諦めない…！覚悟おっ…！」

そして重山は拳を構え突撃してくる。瑠奈は意識が朦朧とするなか、なんとか一撃目を避ける

「…っ…！」

「…やべえ、視界が霞んでやがる…貧血か…？」

「次は…外さない！」

そして2撃目が来る。瑠奈は避けようとするが、足元がふらつき直撃を受けた

「…ガハアツ！？」「重力でお前をその場に固定する…！…二発目え！」

そしてさらに瑠奈を殴り付ける。瑠奈は重力を強められ、その場でサンドバックにされていた。だかそこに風の刃が飛んできて重山に当たり、重山を吹き飛ばした

「ぐっ…！？」

「…？」

「よお瑠奈、随分な有り様だな…手加減してる場合か？」

「瑠奈さん！大丈夫ですか！？」

そこに風野と瑠璃がやって来たのだった。瑠璃はすぐに瑠奈に駆け寄る

「瑠奈さん！瑠奈さん！！」

「き…聞こえてる…平気だ…」

「どこがですか！？…何で、こんな…」

「さあ、な…。俺は飛鳥の仇、らしいが…」

「…重山！！」

瑠璃は風野の攻撃を受けよろめく重山の前に立つ。そして…

「な、何よ…」

「飛鳥は…本当に瑠奈さんは仇なんですか！？」

「そ、そうよ。烈火は姉さんを見殺しにした張本人…」

「だったら私も同じで、飛鳥を見殺しにしました」

「…！！」

瑠璃は真面目にそう告げると、重山の表情がまた剣幕になる

「…なん、だと…！」

「だけど、飛鳥は自らその道を選んだ…、自らの意思で！それを貴女は勘違いしてる！」

「黙れ！綺麗事を並べても、姉さんは生き返らない！」

「重山飛鳥は…死にたくて死んだんじゃない！！私達と願いが一緒だから死んだんだ！本当は生きたかった、でも…飛鳥は不器用だから、私を生かそうとした…だから死んだ！」

瑠璃が涙ながらに訴える。その姿に場にいた三人は黙る

「私の力不足もありましたけど…、飛鳥は、私達を生かしたんです！その思いを…勝手にねじ曲げるなっ！」

そついで放つと、瑠璃から急に光の力が解放される。その力に反発する瑠奈は壁に吹き飛ばされる

「あああああっ！」

「…何よ、これ…」

「まずい、まずいぞ烈火あ！目え覚ませ…早くしねえと！」

「…ちつ。言われなくても…！」

瑠奈は力を解放するが、傷が深く最大限の力は出せない。その中で自分の火力を全て機動力に回し、瑠璃に体当たりをかました。瑠璃はまともに受け、床を転げ回る

「あうっ……」

「目え覚ませ、瑠璃。こいつにとつちや飛鳥は肉親だ。憎い気持ちも分かる」

「……だ、だけど……」

すると瑠奈は笑みをこぼし、飛鳥に対し

「だったら……後日弔い決戦をしようじゃねえか？ 栗とやら……よ？」

この瑠奈の提案に対し、重山は少し考えたが

「……いいだろう、乗った。貴様に引導を渡すのは後日にしてやる」

と、瑠奈の提案を受け入れた。瑠璃は驚き、先程ぶつけた左腕をさすりながら瑠奈の身を案じた。瑠璃は瑠奈の傷が深手であることに気付いているのだ

「で、でも瑠奈さん……その怪我はすぐには……」

「決戦は3日後、ロストキングダムでやる。あそこなら誰も傷つかねえ」

「……どこでも構わない、貴様を殺せるならな」

「だから今日は退け。ここで戦ったところで共倒れが関の山だ」

そうして重山は新組織を去った。瑠奈は血が頭に回ってないらしく、程なくして倒れてしまった。その場に風野、瑠璃が駆け寄る

「烈火！？ おい烈火！！ しっかりしやがれ！！」

「瑠奈さん！！ 直ちに瑠奈さんを救護室へ、急いで！」

そして風野は瑠奈を担ぎ、瑠璃と風野の二人は急いで救護室へ向かった……

＝ 新組織、救護室 ＝

「……」

「……傷は？」

「今日の試験によるものだ。あいつ、手加減してるからこんな事に…」
救護室には天鳳院が居て、天鳳院が手当てが出来ると言うことで天鳳院に看てもらっていた。瑠璃は心配し、しきりに瑠奈の顔をのぞき込んでいた

「…肋骨と胸骨、鎖骨にかけて複数箇所の骨折。それに全身打撲に捻挫…こんなの、簡単になる傷じゃない」

天鳳院は瑠奈の有り様を見て普段は感情を表に出さないのだが、驚きを露にしていた。瑠璃は天鳳院に焦りながら、3日後について聞く

「3日後に決戦があるんです…なんとかありませんか？」

この問いにはさすがの天鳳院も呆れ

「さすがに無理。…3日後に意識を取り戻してるかも分からない」

「な、なら私の治癒の力で…」

この言葉に対しては表情を曇らせ

「それも無理。この怪我を治す程の力を使うのは貴女でも耐えられない」

「…そんな…」

瑠璃の力はとてつもなく大きな力を秘めているが、代わりに使用したときの代償があった。現にさつき暴走したときの代償で瑠璃は未だに頭痛が収まらなかった

「やっぱ無理だぜ、3日後なんて…この馬鹿が、何を根拠にそんな事を切り出しやがるんだよ」

「…風野さん、天鳳院さん、…少し席を外してくれませんか？」

瑠璃は神妙な面持ちで二人に話す。二人は納得した表情で

「ああ、分かったよ」

「…うん」

救護室から出ていった。その場にはベッドで意識を失っている瑠奈と瑠璃のみになった。瑠璃は瑠奈の傷だらけの手を握り、涙を流す。3日後、瑠奈は果たして意識を回復し、重山と対することが出来るのだろうか…

「…瑠奈さん、なんで貴女があんな形で再戦を望むか、私には図りかねます。でも…私、貴方が望むなら文句は言いませんから。…だから、お願い。早く起きて…」

4話：イフ、召喚！！

「新組織、救護室」

「…」

「…ん、うん…」

能力者選抜試験から1日、瑠璃と瑠奈は救護室で一夜を明かしていた。瑠奈は相変わらず意識は戻らず、瑠璃は看病していたが、知らぬ間に覆い被さるように寝てしまっていた

「…いけない、私…」

「…」

布団を少し捲ると、上半身を包帯で巻かれた瑠奈の姿がある。瑠璃はその姿に表情を曇らせた。その部屋にノックがされる

「…はい」

「ずっと付きつきりかしら？貴女も熱心ね…」

「…夢村さん？」

入ってきたのは夢村だった。ただ、夢村は傷だらけだった

「…その傷、どうしたんです？」

「ああ、これ？ちよつと召喚テストをね…」

「…召喚…テスト…？」

召喚という言葉に瑠璃は引つ掛かりを覚えた。今の地下の住人に召喚が行える能力者は居なかった。今回の能力者の試験でも召喚を行った人間は居なかったからである

「ふふ…何でつて顔してるわね？簡単よ…私、召喚の技能を覚えたの」

「夢村さんが？でも貴女の力…、あつ！？」

「そう、”夢”の力を召喚に用いるのが可能なのよ」

そういうと、夢村は瑠璃の手を引き外に出ようとすする。瑠璃は慌てて立ち止まり

「ち、ちよつと…瑠奈さんが一人に…」

「大丈夫 ちゃくんと代わりを連れてきた」
すると、さらに一人入る。その人は…

「お久し振り、瑠璃」

「…聖…！」

聖澤だった。背中に大きな鎌を背負うようになった以外に代わりはなさそうだ

「その間は私が見てる。安心しなさい。…きっと、瑠璃の力にもなるだろうしね」

「で、でも…」

「重山の妹との決戦」

「…！」

「今の烈火じゃ動くのも無理そうだけど、私の治癒の力ならなんとか戦えるまでなら…」

「でもそれじゃあ貴女は…」

「私はしばらく戦闘要員にはならないでしょうから…それに、烈火が目覚めたとき、瑠璃が寝てたら…意味がないでしょ」

聖澤の覚悟の目に、瑠璃は諦め

「分かった…、お願い聖」

「…はいよっ！」

「じゃ、しゅっぱーっ！」

そして夢村と瑠璃が駆けていった。聖澤は瑠奈の近くの椅子に腰掛け、ため息混じりに呟く

「はあ…なんなんだろ、やっぱり光の血、なのかなあ…。…兄さん、あれから、どこに…」

「…」

「とにかく、そのためにも貴方には起きてもらおうわ。” 治癒法陣”」

「…これでよし」

「…これ？」

夢村と瑠璃は道場で召喚テストを行うことにし、既に夢村は力を解放していた

「ま、証明するにはやっぱり見なきゃ分からないからね…じゃ、行くよ…」

すると夢村の周りに沢山の赤い帯状の物が輪を作り回り始めた。夢村は手を正面にかざし、力を増幅させていく

「…呪文は無いんですか？」

「あのねえ…別にRPG系じゃないんだから、呪文なんかあるわけないじゃない」

「でも大体召喚っていったら、なんかかっこいい呪文を言って、魔方阵からばーんってかっこいいドラゴンが…」

瑠璃が必死に脳内の召喚を説明しているが、まるでゲームのようで夢村は呆れていた。そして赤い帯状の輪の動きが加速し…

「じゃ、無駄口はやめ。行くよおっ！！”召喚輪・フレイル”！！」

そして夢村の手から放たれた一筋の赤い光が地面を照らすと、そこから筒状に光が立ち上り、それが消えると…そこには

「…おろ？ここは…どこ？」

一人の少女が座っていた。透き通る赤い瞳に赤い髪、胸元に光る赤い石。そして、人間と同じ格好…

「…夢村、さん？」

「あ、あれれ…？こんなはずじゃ無かったんだけどなあ…？」

夢村は冷や汗をかきながら瑠璃とその少女から目を背ける。こんな予定ではなかったようだ。瑠璃はその少女と話し始める

「ねえねえ、貴女？」

「…むー、お姉ちゃん、誰？」

少女は警戒していた。いきなりこの世界に呼び出されているので無理もないが。ただ瑠璃はそれも構いなしに話を始める

「お名前は？」

「…私の名は、イフリータ、イフリータ。Fバーズ。イフって覚えて欲しい！」

「イフは…何者？」

「私は人間…かな？というよりは、人間に近い存在だと思う」

瑠璃は笑顔で話を続ける

「もしかして…火の力を使える？」

「うん！…見ててっ！」

そういうとイフは人指し指を立て、石に狙いを定めると…

「ビームッ！！」

「…！？」

熱線を放ち、石を砕いた。イフは相当な力を持っているようだ。それを見せると、今度はイフが瑠璃に

「ねえ、何で私を呼んだの？」

「いきなり本題ですか…」

「また唐突な…」

「ねーねー、何で呼んだのーっ…って、あ」

ただ、イフが何かに気付く。いつの間にか道場の入り口に腕を包帯でグルグル巻きにした瑠奈が立っていた。意識ははっきりしているようで

「よう。瑠璃、夢村」

「…る、瑠奈…さん？だ、大丈夫…じゃ…ないですね」

「…馬鹿ね、熱血馬鹿ね」

「おい、随分な言われようだな」

黒の半袖YシャツにGパン、そこから見える肌という肌に包帯が巻かれ、所々血が滲んでいた

「…で、そいつは？」

「で、このにーちゃんは？」

瑠奈とイフが互いに指を指し、瑠璃と夢村に聞く。二人は困った顔で

「…あはは…」

苦笑をした。：これが、事態を好転させることになる…

「こいつ、誰だ？」

「この人、誰？」

5話：女難？

「新組織、道場」

「…む…」

「…あ？」

「…」

道場には今瑠奈、瑠璃、夢村、そして召喚により呼び出されたイフリータが居た。瑠奈とイフリータは互いが奇な存在に見え、警戒を解かなかったのだが…

「ねーねー、君…もしかして、炎の能力者だったり？」

「…!!?」

一同はイフの発言に驚きは隠せなかった。この子はやはり炎を扱えるのか…と考えていると

「なら…試させてもらうよっ!」虹の能力者『!!』

そついい、腕に炎をまとい瑠奈に殴りかかってきた。瑠奈は痛む身体を引きずりながらかわす

「る、瑠奈さんっ!？」

「瑠璃、夢村っ!どけえっ!」

瑠奈は瑠璃と夢村に撤退を促したが…瑠璃が逃げようとするが、夢村がその場から動けなかった。どうやら召喚をすると行動に制限がかかるようだ

「ゆ、夢村さん？」

「私は動けないわ。それこそこの子をしまわないとね」

「…だったら、私も逃げません。この戦い、見せてもらいますね？」
「なっ!?!…当たっても知らねえからな!？」焰ノ風!」

瑠奈は炎を巻き上げ、それをイフに向かわせるが、イフはそれを片手で消し去る。イフは無邪気に笑いながら

「あははーっ！それじゃ私に傷1つ付けらんないよ〜！」

そういうと、急に室内の温度が上がる。そしてイフの姿が消えた

「…くそ、陽炎をうまく使いやがるな…！」

「お、分かってるじゃーん！」

すると瑠奈の前に炎の短剣を持ったイフが突如現れ、短剣で瑠奈に襲いかかった。だが瑠奈はある程度の奇襲は分かっていたため、刀でその攻撃を防ぐ。終始イフは笑顔だった

「…夢村さん、まだしまえませんか？」

「ええ、無理ね。むしろ私が召喚した事になってないみたい。…術式が解かれたわ」

すると夢村が瑠璃に手の甲を見せる。"夢"の字は既に消えていた。夢村は暑いのか額の汗を拭いながら

「…それにしても、瑠奈は本当に女難ね」

と、さらっと言う。その言葉の意味が分からないと言う瑠璃の顔を見て、夢村は付け加える

「瑠璃や紗菜、泉野や日向、イフ…。瑠奈は女性といると苦勞するのね？」

その頃戦いはさらに激化していた。瑠奈は力を防御に回し、刀で斬りかかるがイフは陽炎で分身を作り、その攻撃をかわしている。だが互いの表情は晴れやかだった。そして、急にイフが攻撃の手を止め、武器を消したのだった。その行動に瑠奈も刀を鞘に納めた

「もーいつかなー、大体強さも分かったし！」

「…試されてたっつう事か、俺は」

「そそ、私が貴女にさらなる力を与えるに相応しいか、をね」

「新しい力…？」

「ちよっといっかな…我慢してね？」

そういうとイフは瑠奈に近づき、瑠奈の胸部に炎が入った珠を近づけた。すると瑠奈は強制的に力を解放させられる

「な、なんだ!？」

「…そういう事かい、じゃ、私は貴女に力を与えただけ、か」

夢村はつまらなさそうに溜め息を吐く

「…力を？」

「要するに、イフは炎の守護者、それを私が力を与え、目覚めさせたの」

「でも瑠奈さんを媒体にして召喚をしたわけじゃ…」

質問をする瑠璃に夢村は赤い宝石を見せる。それは昔瑠璃が拾った

『灼熱のルビー』だった

「…これが…」

そして瑠奈の方はイフの持つ珠の光が消える。そしてイフがさらに瑠奈に近づき…

「じゃ、契約するね？」

「契約？…何のだよ」

「私は貴方を正式に虹の守護者と認めるってね」

「はあ？虹って…俺は炎と闇しか使えないんだが…」

「つべこべ言うなっ！」

そして…イフは瑠奈に抱きつき、キスをした…

「！！！！？」

「なっ…！！？」

「…る、な、さん…？」

「契約、完了」

新キャラ紹介？

今回の新キャラ紹介のために訪れたのは…薄紫のシヨートヘアを靡かせ現れた。…光瑠璃である。

「皆さん、お元気ですか？ 光です じゃあ、今回もキャラ紹介をして行きますね」

聖澤 聖：21歳、女。瑠璃の姉であり、天導の妹。瑠璃と同じく光の守護者。武器は鎌。瑠璃が優遇されるのを良しとはしないが、瑠璃には優しい。好物は唐揚げ

イフリーターFFバーズ：年齢不詳、女。容姿的には瑠璃と同じ21歳？炎を司る『能力の女神』の一人。瑠奈にキスをし、虹の能力の力を与えた。他に仲間が沢山居るらしい。ちなみに瑠奈が好き。料理は殺人的レベルに下手

闇本 伶：22歳、男。瑠奈の持つ闇の力が瑠奈に影響を与えると瑠奈の身体を借り現れるいわゆる『もう一人の瑠奈』である。現在は瑠奈の為に力を惜しまないが、多少自由気まま

6話：烈火に備わるさらなる力"虹";

Ⅱ新組織、道場Ⅱ

瑠奈はイフリータに試されていた。イフは瑠奈が虹の能力者にふさわしいかを見極めていた。そして契約という事でイフは瑠奈にキスをした。：現場はそれから少し時間が経過し、瑠奈、イフ、瑠璃、夢村で四人で輪を作り座っていた。だが不気味な沈黙がその場を覆っていた

「…契約って…これをやって何が変わったんだ？」

その沈黙を破ったのは瑠奈だった。瑠璃はジト目で瑠奈を見て、夢村は警戒の眼差しでイフを見つめている。そんな状況をよそにイフは瑠奈の腕に抱きつきながら

「君は虹の力に目覚めたのだよ」

「…何も変わってないんだが…」

「あ、そー言えばこれを渡すのを忘れてたよ」

そついいイフは沢山の石がついたブレスレットを手渡した。瑠奈はそれを腕にはめ

「…これでどうしたらいいんだ？」

「起動ネームは”オープンチャネル起陣”[。]そしてだよ」

「…”起陣”」

そう瑠奈がいうと瑠奈の足元に魔方陣が形成され、石が輝き出した

「そして自分の使いたい属性を叫ぶ！するとね…」

「…”イカズチ”！！」

すると瑠奈の髪が黄色になり、腕にプラスナツクルが装備される。身体には電気が帯びていた

「瑠奈さん…その力は…」

「…マジか…本当に使えるのかよ…」

瑠奈達は驚いていた。ただでさえ瑠璃や瑠奈のように二重能力を持

つ人は少ないのであったからだ

「頑張つて使いこなしてね これを起動したら私も呼び出せるからねえ」

するとイフも炎と共に消えていった。瑠璃は凄いい剣幕で瑠奈を睨み付ける

「…瑠奈さん…」

「な、なんだよ瑠璃…」

「…不可抗力でも、ショック…です」

「き、気にすんなよ！別にイフも俺が好きでこんなことやったわけじゃないだろうし…」

「バカね」

「バカですね」

瑠璃と夢村があきれたように言い放ち、瑠奈を置いてその場から離れる。瑠奈も遅れてついていった…

「ちょ、お前ら…待ってっ！？」

「……………」

「…以上が報告であります」

「…ほう、ついに現れたか」

とある場所で大男と兵隊が話をしていた。兵隊が立ち去ると、三人の男女がその大男の前に現れ、話を始める

「…お館様、そろそろ動くときでは」

「まあそう急ぐな、木山田。お前がどうこうしたところであの烈火と言う男には勝てまい？」

「…確かに」

「ねーねー、なら私にやらせてくんない？あの男には借りもあるし…倒した後の美酒はうまいだろうしねえ！？」

「馬鹿者。勝てるわけなかるうが。お前が10人居ても無駄だろう」「なら誰が出る、お館？…俺に出ると？」

「まあそう急かすな、分隊を派遣しろ。とりあえず相手の戦力を見る」

「烈火が出なかったら？」

「それならそれでもいいと思うがな。愛の巫女を捕らえようとすれば烈火の精神を逆撫でするだけだ。怒りに身を任せた時の烈火の力は見てるだろう？木山田、御酒？」

「…ふん」

「確かにそうだけれど…」

木山田と言う忍びの格好をした男と御酒と言う酒を片手に持つ女が大男に確信を突かれ黙る。だがもう一人の男がさらに話を続ける

「じゃあ今回の分隊派遣の目的は魔石の回収、および敵戦力の把握でいいんだな？」

この男の発言に大男の口元が緩む

「おお。指揮はお前に任せる。深追いは厳禁だぞ」

「任された」

そして三人は消え、任された男がその場に残る。その男に不敵に笑いながら、その場をゆつきり後にする

「…ククツ…クハハハハツ…！天上、地下、牙獣を制圧した力…俺が封じる！」

「新組織」

その頃瑠奈は新組織の郊外の地域まで散歩がてら足を運んでいた

「…ったく…なんでこんなもんを…」

目的はイフからもらったブレスレッドについてる石の力を確かめるためだった

「…起陣”！！」

そして魔方阵を呼び出し…

「…フレイム”！！」

炎の力を覚醒させた。いつも以上の火力に瑠奈は若干動揺しているが、すぐに扱いになれ、刀に炎を集めた

「…おい、イフ」

『なーんだい？』

刀から声が聞こえた。イフは守護霊のように瑠奈に寄り添っているのだ

「俺の元々の力が増幅されてるのか、これは？」

『そだね〜 違う言い方をするなら、瑠奈の潜在能力を引き出してる、と言うべきかな？』

「元々これくらいの力を使える、って事か？」

『だけど瑠奈の能力には限界がある。だから今までは使えなかったんだよ』

「…理解できなくは無いな」

するとそこに、あの男の軍隊が現れた

「…！」

「目標発見、攻撃開始」

その男たち三人が瑠奈に短刀で斬りかかる。瑠奈は刀を構える

『…試す良い機会だね！ちゃちゃっと焼き払っちゃって！』

「言われなくても！」

そして相手の隊列に飛び込み…

「自ら飛び込んでくるとは…」

「そついう戦い方だからな！」

そして刀を地面に突き立てた瞬間、そこから炎が渦を巻いて現れ、男たちを吹き飛ばした

『「」 焰竜・竜巻”！！”』

その巻き上がる炎が龍となり敵を吹き飛ばしたのだった。ただ一撃を放っただけなのに瑠奈は汗だくだった。この力を使う代償は非常に大きかったようだ

「なんだ、この疲労感…おいイフ！」

『まだまだ使い慣れてないんだから仕方ないよ』

「…笑い事かよ…」

その姿を影から覗いていた人間が居たことを瑠奈は気付かなかった
…

7話：女神の力？

「新組織郊外」

「！！まだ居たか！！」

「…意外と大勢居たもんだね？」

瑠奈達は謎の男たちの襲撃を受け、撃退したかに見えたが、新組織に戻る最中、また謎の集団が後ろから迫ってくるのに気付いた。相手は炎、雷、水、風を拳にまとっていた。それを見た瑠奈は苦笑を浮かべながら刀を抜く

「ん？ここでドンパチやるの？」

「仕方ねえだろ？わざわざあいつらに救援を求めるつもりはねえ…」

「でも今の瑠奈じゃ、身体に負担が大きすぎるよ。ここは無茶をしないで…」

「…使わなきゃいいんだろ？」

そついいそのまま突進する。相手は四人、瑠奈はまずは炎をまとつ男に接近し、刀で斬り伏せた

「ごはあつ！」

「悪いな、容赦はしねえよ？」

「…貴様っ！」

次に雷と風の男が接近してくる。挟み撃ちを仕掛けてくるが瑠奈冷静に雷の男に仕掛けた

「…なっ！？」

「寸劇だったな」

そして雷の男を斬る。後ろからは風の男が走ってきているが、瑠奈は落ち着いてその拳を防ぎ

「！！止めたっ！？」

「斬るっ！！」

そして風の男も斬り伏せた。最後に残ったのは水の男だった。その

男は拳を振り抜く。瑠奈はその拳を冷静にかわすが…

「！！！！？」

急に瑠奈は足元がふらつき、その場に転倒してしまった。男はそこに追撃をかけるがなんとかかわし、体勢を整える。瑠奈は大量の汗を流していた。その姿を見たイフは

『やっぱり無理してる…』

と核心をつく。だが瑠奈は一切そういう事は言わず、魔石の力を使う

「起陣、サンダー」！

そして雷の力を身にまとい、拳で相手の顔をえぐり吹き飛ばした。

だが…

「…げほっ！！」

瑠奈は吐血をし、その場に倒れた。そこにまた謎の集団が現れるが…

『ちよつと！！起きてっ！！』

「…」

「憤怒の炎だな。…命をもらい受ける」

敵が刀を持ち、瑠奈に近寄る。するとイフが魔方陣を描き…

『…仕方ない！！力を借りるとしようかなっ！！』

そついで瑠奈の身体に抱きつく。すると瑠奈の身体が光に包まれ、服装はそのままだが女の子になっていた。

「…烈火じゃ、ない？」

「んふふふ 私は瑠奈だよ？ただ…身体だけねっ」

そついうとイフは手を前に広げる。そして…

「焼き払え！」業火灼熱”！！」

そして炎が敵を一瞬の内に飲み込み、辺り一面を燃やし尽くした。

イフは満足げに笑う

「にはははは、私の魔力をバカにしたらダメだよ？あんたらなんか、眼中にないんだから」

「やはり現れたか、女神」

するとそこにまた違う男が現れた。その男はマントで全身を覆っているため容姿は分からないが、声質から男だと言つのが分かった。

その男をイフは嫌な目付きで見つめる

「…誰あんた？私は女神なんて大層な人間じゃないよ」

「ふ…本人はそう思うだろうが、今この場を見てみる？お前の能力の強さが今、ここに現れている。それを見て女神と言わずどうする？」

「うざいな、そ〜いうの〜！私の前から消えてくれない？」

「いや、別にお前に喧嘩を売りに来たわけではない。どうだ？俺らのとこに来ないか？」

ここでその男が変な提案をしていく。イフにはその言葉の意味が全然理解できなかった。不快感を露にしながらその男とはなしを進める
「はあ？意味分からなく〜い！軍勢って何？今この世界にそんなのあんの？」

「さて、な？あまり深くは語る気は無い。ただ俺たちはその石が欲しいのさ」

男はイフの腕に巻かれた石を指差した

「俺たちはその力が欲しい。それを世のために使いたいのさ」

「ふ〜ん？で？私は瑠奈と契約した。だからそっちなはいかな〜い！」

イフはだからどうしたと全身で表現するかのようによろこぶ。それを見た男は最後に

「…だったらその器を壊せば、お前は手に入るんだな？」

と言う。イフは少し笑いながら

「やれるならやってみれば？…あんたらが思うほど、瑠奈の器は小さくない、むしろ怖いくらい大きいんだから」

「…信用してるのだな？まあ、その信用を壊すのも一興か…」

そついい男はその場から姿を消した。イフは少し苛立ちを見せながらも

「ふふ…この世界はやつぱりおもしろいんだね〜？…瑠奈？私をしっかりと守ってね〜？」

そついいイフは瑠奈に体を戻さぬまま新組織に歩みを進めていった…

「新組織、大広間」

「たっだいまー!!」

「……??」

新組織の大広間には瑠璃と風野が居たが、二人ともイフの姿を見てキョトンとしていた。何故なら瑠奈の服を来たイフが勢いよくドアを開けたからだ

「……あの……瑠奈さん……じゃないですよね？」

「ん？違うよ？イフだよー」

「イフ……？」

風野はイフの存在をまだ知らなかった。その事を瑠璃から説明を受けると

「烈火……お前は本当にモテるな」

と恨めしそうにイフを見つめる。イフはなんの事か分からないため無視して話をすすめる

「今あたしは瑠奈から身体を借りてるの」

「なんでまた瑠奈さんの身体を借りることに？」

「ちよつと能力の酷使が身体に響いたようなんだよね？ちよつと意識を失っちゃったんだ」

「はあ！？なんで能力をそんな……」

「まあ、色々あったんだよ」

「……だったら、早く身体を瑠奈さんに返してください」

瑠璃は少し怒った顔でイフに求める。イフは笑いながら快諾する。そして再び光に包まれ、瑠奈が現れる。既に瞳は閉じ、その場に倒れ込むような形で瑠璃にと風野に支えられた。

「烈火、おい、烈火！」

「瑠奈さん！しっかりしてくださいー!!」

「……」

瑠奈は顔色が悪く、口元は血で汚れていた。瑠璃は風野に指示を出し、瑠璃の部屋で看病をすることになった…

「新組織、瑠璃の部屋」

「…」

「瑠奈さん…疲れがたまってるんですね…熱が高いですね…」

瑠璃は冷やしたタオルを瑠奈の頭の上にのせると、瑠奈のうでの魔石に目をやると、憂いの目に変わる

「…この石が、瑠奈さんを…」

「またまた、そ〜やって私のせいにするの？嫉妬？」

「!?!?」

瑠璃が驚きうしろを振り向くと、そこには初対面の時と同じ格好のイフが居た。イフは笑いながら瑠璃のとなりに座り、肩を抱く

「やっぱり良い子だね〜、瑠璃は」

「な、何がですか!?!?」

「こーやって寝ずに看病してるんでしょ？全く、献身的なんだから」

瑠璃は顔を赤くし、俯く

「瑠奈の今の原因はたぶん不馴れな力の行使による心身の負担の増大だよ。…まあ、瑠璃には悪いって思ってるよ？」

イフは急に瑠璃に頭を下げた。瑠璃はそれに戸惑い、手を横にふりながらそれをやめさせる

「べ、別に謝って欲しいとかじゃなくて…。あの、イフは…なんで瑠奈さんを選んだの？」

瑠璃は自分の中で一番疑問だった問題をイフに問いかける。するとイフは笑いながらこう答えた

「なんとなく、かな？」

その答えに瑠璃はすこしむっとしながらも、すぐに落ち着き会話を続ける

「瑠奈さんはやつぱり、貴女から見ても大分異質な人なんですか？」
『そだね〜、大分変かな？それを言うなら貴女も十分変だけどね？』

「それは、二重能力者だから？」

『いや、違うよ〜？なんて言うんだろ…他の能力者とは違う何か、貴女たちにはある…って感じ？』

「その…何か、とは？」

『それはちよつと私にも分かんないな…あ、もうダメかな？』
するとイフの身体が半透明になる。瑠璃はその姿を見て少し驚く

「…どうしたんですか？」

『あはは…私も少し力を使いすぎたかな？今日はもうダメみたい』
「…さつき、貴女達に何があつたんですか？」

瑠璃が真剣な眼差しでイフに聞くが、イフはそれを言う前に消えてしまった。それを確認した瑠璃はまた視線を瑠奈に移す

「…瑠奈さん、今度は、私も貴方を守りたい…。だから…無理はないで下さいね…？」

そついい、瑠璃は瑠奈に覆い被さるように身体を預け、眠りについた…

〓 新組織、門前 〓

夜中、新組織の門前に女が一人佇んでいた。その女は髪が腰まで長く黒く、腰元には刀が、そしてその女の手には何か握られていた…
「…ただいま、皆さん。…ただいま、お兄ちゃん！」

8話：帰還した戦乙女。そして、いざ決戦へ！

「新組織」

「…はっ！ま、また寝ちゃった…」

瑠璃は瑠奈の看病をしていた。瑠奈は能力の酷使により眠りについているようだが、瑠璃は瑠奈が明日に控えた重山との決戦があり、それを万全の状態を迎えてほしかったのだ。だが瑠璃も疲れて寝てしまっていた

「…とうとう明日…ですね…」

そこにドアのノック音が響いた。瑠璃がそれを確認し、ドアを開けると…そこには刀を持った髪の長い女の子が居た。…灼沢だった

「お久しぶりです、瑠璃さん」

「灼沢さん！？いつこっちに…」

灼沢はあの事件後特訓をすると行ってスラムの方にいつていたらしい。灼沢は瑠奈が後ろに寝てるのに気付き、瑠璃に対しジト目で睨み付ける。それに瑠璃は焦りを隠せなかった

「え、えと…あの…その…」

「…何があっただんですか？正直に話していただけますね？」

「あ、はい…実は…」

瑠璃は灼沢に瑠奈が魔石を手に入れ、潜在能力を呼び覚ましたこと、それが瑠奈に多大な負担を与えていること、それに明日は重山の妹との対決が控えていることを明かした。すると灼沢は少し悩んでいたが

「兄さんが自分でやったことなら文句は言えないね」

と笑って返した。どうやら灼沢は明日の戦いには出るべきと考えているようだ

「…でもさっきから起きないんですね…」

「あれ、そういう事なら聖澤さんが得意なんじゃ…」

「…あれ？そういうえば聖をさつきから見掛けない…」

瑠璃の疑問はこれだ。瑠璃は夢村に召喚を見せると言う話をして、そこに聖澤が来て瑠奈を任せた。だが夢村がイフを召喚した時には瑠奈が一人で現れていた。だが瑠奈の外傷は大体消えていた。だがそれ以降聖澤は現れない。…これはいったいどういう事なのだろうか

「…ちよつと探してきました。瑠奈さんを…」

「はい、任されましたよ」

そついい瑠璃は瑠奈を灼沢に託し瑠璃はその場を後にした…

「新組織、時計台」

「…ん、後探してないのはここだけ…何処に行ったんだろ…」

瑠璃は新組織の中を探し回ったが聖澤は見つからず、とうとう新組織にある時計台に辿り着いた。そこに大鎌を肩に引つ提げた女が佇んでいた

「…聖？」

瑠璃はその女が聖澤であることは分かっていた。瑠璃が声をかけるとその女が振り替える。やはり聖澤だった

「…瑠璃？」

聖澤は驚いていた。瑠璃がこっちに来るとは思っていなかったのだろうか

「何でこんな所に…まさかずつと？」

「来たのはさつき。瑠奈の件でちよつと考えることがあつてね…」

ため息をつく聖澤。どうやら瑠璃達と別れた後何かあつたらしい

「…何かあつた？」

「瑠奈の身体に異変が起きてる。…昔、能力の枯渇で瑠奈の身体が消えかかったことがあるじゃない？」

「それが…？まさかまた？」

「いや、今回はむしろ逆。溢れてるのよ。濃度が濃すぎる」

「え？」

「瑠奈の身体がその濃度に耐えられるかが疑問ね？」聖澤は瑠奈の能力が瑠奈自身の許容範囲を越えてしまうと思っ指摘している。だが瑠璃は先程瑠奈と居た際にもそのようなものが感じられず、ただ疑問でしかなかった

「で、でも私はさっきまで一緒に…でもそんな事は感じなかった…」
「瑠璃、もしかして貴女…力を貰われた？」

「…あ、あれ？」
瑠璃は力を解放しようとするが、何故か力は発動しなかった。瑠璃は頑張つて光を出そうとするが、手元に小さい光の珠を出すのが精一杯だった。瑠璃は動揺している

「…な、なんで…？」
「瑠奈の力は闇も入ってる。だとするとそれが影響してるのかも知れない…」

「…え！？だとすると瑠奈さんにも何か感じられても…！？」
だがここで瑠璃がはっと気付く。そういえば最近の瑠奈は召喚されたイフを宿している。そしてそのイフは夢村から瑠奈に移った

「…いや、だとすれば…」
「逆に重山妹と戦うのは好都合ね、放出出来るし…」
「…自分自身で出力を調整できるなら、ね？」
その言葉に聖澤も同意した。その頃…

「新組織、瑠璃の部屋」

瑠璃の部屋には灼沢、瑠奈が居た。だが、急に瑠奈の身体が光出すると、瑠奈が立ち上がり、イフに変わった。灼沢は呆然とイフを見る
「んにゅ〜う…まだ眠い〜…」

「…???誰？」
「あ、瑠奈の知り合い？初めまして〜 イフリータです イフって呼んでね？」

「?あゝ、ん？」

灼沢は混乱していた。目の前で寝ていた瑠奈が急に女性になって起き上がったからだ

「今私は瑠奈の身体を借りて貴女と話をしてるの、それは理解できる？」

「…そういう事が、脅かさないでよ…」

「私は炎の女神なの」

「…へ？」

「だから、貴女も炎の力の持ち主だっつてすぐ分かっちゃった」

イフは一目見て灼沢が炎の能力者と見抜くと、灼沢の手をとる。すると灼沢の炎の力が勝手に解放された

「え、え!？」

「同じ能力者なら、力の解放の原理も同じ…だったらお安いご用なのさ」

「…」

イフは無邪気に笑う。その姿に灼沢は圧倒されていた

「まー、どの道瑠奈ももう目覚めるみたいだし、消えちゃうけどね」

「ま、待って!…貴女は、何者？」

そしてイフの身体が光始める。だがそこで一瞬灼沢の方に振り返り

「炎の守護者だよ!」

そっくり、また瑠奈の姿に戻った。瑠奈はベッドに戻されては居た

が、今は目を覚ましていた。瑠奈は灼沢がいることに多少驚いていた

「紗菜か?しばらく振りだな？」

「う、うん…」

灼沢は自分の力を勝手に解放させる瑠奈の中に居るイフの存在に少し恐怖を覚えるのだった…そして翌日…

「第一階層、ネイチャーガーデン・ロストキングダム」

「…約束の日、約束の場所、か」

瑠奈は单身ロストキングダムに乗り込んだ。いつもの刀を腰に携え、

既に力を解放していたが、まだ怪我だらけだった。そこにイフが語りかける

『ねーねー、その身体じゃ無茶じゃない？』

「うるせえ、黙ってる爆炎娘！これは俺があいつとかわした約束だ、約束は守らなきゃな」

『爆炎娘って何さー！そんなに暑苦しくないし〜っ！』

イフは爆炎娘って呼び方が気に入らないらしく瑠奈に文句をいうが、瑠奈は気にも留めず約束の場所に向かった。瑠奈にとって重山は負けられない相手なのだ。そして、決戦の場所につくと城内の反対側には既に重山が待ち構えていた。重山は明らかかな嫌悪感を隠そうともせず、瑠奈に向かう

「逃げずに来たか、この人殺し」

「酷い言われようだな…、その口の聞き方、飛鳥にそっくりだよ」

「黙れ！お前にそんな事言われたくない！姉を殺したのはお前だ！お前がすっかりしてさえいれば…！」

重山は今にも飛びかかりそうな状態だが、瑠奈は落ち着いて重山と対峙する

「飛鳥が死んだことには詫びるが、飛鳥が居た場所ってのは強き者が生き延び、弱き者が死ぬ世界。飛鳥も覚悟はしていたはずだ」

「姉を侮辱するのか…姉は弱かったと…！」

この重山の発言に瑠奈はふっと笑い、刀に手をかける

「侮辱じゃない…お前と違って、潔いんだよ…！」

9話：烈火vs重山、再び

「ロストキングダム」

「姉を愚弄する奴は許さないっつー！」

「あいつは…あいつらしい最期を自ら選んだ…それは揺らがねえ！
妹であるお前が分かってやらねえでどうするっ！」

重山の拳と瑠奈の剣が互いに弾き合う。瑠奈の剣が重山の身体を捉えるかの所で重山は重力により刀の軌道を変えそれをかわし、重山が瑠奈目掛け拳を振るうがそれを瑠奈は刀で防ぐ…一進一退の攻防が始まっていた

「何が潔い最期だ…それが姉の運命だと言いたいのか！」

重山は怒りに任せた拳を撃つ事、そして瑠奈は未だ傷は癒えてないという事があり、瑠奈は重山の拳を防ぐ際にも若干のふらつきがある。その為か瑠奈は攻め手を欠いていた。その中重山の拳をいなし瑠奈は叫ぶ

「運命だとかそんな難しい話じゃない…これは人の意思だ！！飛鳥は瑠璃を守るために生涯命を注いでいた、それをあの時も体現したに過ぎない！！」

だがその様な叫びも怒りの感情に囚われた重山に届くわけがなく、重山の拳が瑠奈の腹を抉る。

「！！！」

「”勢重拳”！！！」

そして瑠奈の身体が壁に思いきり吹き飛ばされる。吐血し、瑠奈は満身創痍状態だった。そこにイフが語りかける

『ちよつとー、あんなやつに手加減なんかいらぬよー！』

「っ…黙れ爆炎娘。俺はこうしなきゃ気が済まねえんだよ」

血を吐きながらもなんとか立ち上がる瑠奈に対し、重山は追い討ち

をかけるべく間合いを詰めてきた

「貴様に…貴様なんか、姉の気持ちが分かってたまるかあああつ
!!!」

そして重山は全力で瑠奈の顔面を殴り飛ばした。瑠奈は地面に叩き
つけられ、刀は遠方に投げ出された

「…がつ…は…」

「…はあ…はあ…こんな貴様ごときを…姉さんが…なんで…何でえ
えっ!!!」

だがその一撃でも重山の怒りは収まらなかった。地面に叩きつけら
れ仰向けになつていた瑠奈にさらに拳を2発、3発と続けて叩き込
んだ。瑠奈は顔面から、そして古傷から流血を起こし服は真っ赤に
なつていた。だがその時重山は涙を流したのだった

「……!?!」

「…なんで、なんで姉さんはこんな男を好きになつたの?こんな弱
くて、ズルい男を…」

「……!」

瑠奈は耳を疑つた。飛鳥は瑠奈の事が好きだった、という事実が信
じられなかった。重山は涙を流しながらさらに続ける

「斬馬を倒した後、一回姉さんはこつちに帰ってきた。その時の姉
さんはとてもいい顔をした。私は不思議に思って聞いてみたんだ。
何かあつたのかつて。すると姉さんは笑いながら言つたんだ。『戦
いの中でおもしろい奴と出会えたから』って」

「……」

「そしてその後天上軍との戦いがあつて、その後また一回帰つてき
た。その時はお前は行方不明だった。姉さん、泣いてたんだ。『も
う泣かないと決めてたけど、自分にとって大事な人を無くすのは、
やっぱり泣けるな』って」

「……」

重山はさらに大粒の涙を流している。それだけ飛鳥を大事にしてた
という事を瑠奈は霞む意識の中でもすぐに感じる事が出来た。重

山はさらに続ける

「そして…牙獣が現れる少し前、帰ってきたんだ。それが私に取って最期の姉さんだった。その時、姉さんは私にこう言って出ていった。『私は、大事な人達と戦う。一つは、瑠璃様。今までずっと守ってきた、雫と同じ妹のような存在。二つは、仲間。長い時間の中で、いろんな人たちと会えた、私にとっては大事な宝物。そして三つは…烈火瑠奈って男。あんなにおもしろくて、強くて、嫉妬できる奴が出来たのは初めて。瑠璃様が居るから言えなかったけど…雫？私、烈火瑠奈って男が、好き』って…」

「…」

瑠奈は重山の攻撃の手が止んだためある程度意識が回復していた。瑠奈は飛鳥がそんな事を考えてるとは全く知らなかった

「…その男が、何で姉さんを守らなかったのか、私は理解できなかった。あれだけ姉さんが好きって思った相手なら、相手もそれくらいの気持ちがあったらと思った。…だけど、お前は姉さんを見てなかった！死んだ後、お前は姉さんの存在を忘れたかのようにだった！だけど姉さんは人知れず恋をしていたんだ！お前にこの気持ちがあるかあああっ！」

そして重山はトドメの一撃を振り下ろす。だが瑠奈はその拳を手で掴み受け止めた。重山はその行動に焦りを隠せなかった

「は、離せっ…！」

「…お前の言いたい事は、それだけか？」

瑠奈の様子が変だった。まるで生気を失ったような目で重山を睨み付けていた

「…うっ…くっ…」

「…飛鳥の気持ちは…確かに申し訳なく思ってる…お前から見たら…俺は、飛鳥に酷いことをしたようにみえるだろう…だがな…」

瑠奈の手にちからが入る。それと同時に力が解放され手が炎に包まれる。重山は熱さに苦しめられる

「…!!…うあああっ…！」

「俺だつて…あいつが死んだのはつらい！皆だつてそうだ！瑠璃なんか特に我慢してるんだ！組織に幽閉されるようになってからずっと重山が傍に居たんだぞ！俺だつて大分お世話になった！そんな奴が居なくなつてつらくないわけが…ねえだろおおっ！」

そして心の悲しみを全てぶつけるように瑠奈の拳が雫の顔面を捉えた。雫は瑠奈により吹き飛ばされ、地面に転がった。下顎を殴られたため目の前がクラクラしてるようだった

「ああああっ！」

「…それだけ飛鳥の事を知つて…なんで分かつてやらない…この状況が、飛鳥が喜ぶのかよ？飛鳥は俺とお前が戦う事を望んでるのかよ？」

瑠奈はゆっくり立ち上がる。ただ意識はまだ完全ではなく気力で立ち上がつてるようだった。目は額からの流血により完全に潰され、身体中からも流血していた

「…」

「教えてやるよ、お前に…俺が受けた、悲しみを…！」

そして炎をまとつた拳を重山に対して撃ち落とそうとした、その時だった

「は…い、そこまで」

「…！」

「！！？？」

不意に上の方から声がしたため瑠奈が見上げると、城の上階に女の影があつた。瑠奈はその女に見覚えがあつた

「…御酒か」

「そうよ、覚えててくれたのね、坊や」

御酒は挑発するように瑠奈に話しかける。瑠奈は気にしないように話を続ける。瑠奈が少し目を周りに向けると、機械兵が周りを囲んでいることに気付いた

「…何しに来た」

「そうねえ…漁夫の利を得に来た、と言えはいいかしら？」

「漁夫の…利？」

重山もふらつきながら立ち上がる

「そう、貴方達二人が戦えばどちらかは戦力外、もう一人も手負いの身。そこに私たちが畳み掛けて、二人の命を奪えば…てね」

「…貴様の思惑通りか」

「そうね、重山の妹がここまで善戦するとは思わなかったけど…良い誤算ね」

「…私は…甘く見られたものだな」

「所詮貴女は小物。私の狙いは烈火の命だけよ？」

「…下衆が」

瑠奈が吐き捨てるようにいうが、状況は最悪だった。意識を保つので精一杯の身体、刀はどこにあるか分からず、重山も手負이었다。御酒は勝ちを確信したように高笑いした

「オーホツホツホ！最強の戦士、烈火瑠奈もここで終わりよ？騙し討ちでも何でも貴方が死ねば万事OKなんだから」

そして周りを囲んでいた機械兵士達が武器を取る。瑠奈達は絶体絶命の窮地にたたされた…

10話：亡き友に捧ぐ、弔いの炎

「ロストキャッツル」

瑠奈と重山の決戦の最中、御酒が機械兵を率い、二人を包囲した。二人は戦いによりダメージが深刻により劣勢になるのは免れなかった。御酒は勝ち誇ったように瑠奈に叫ぶ

「無様だな烈火あ！いくらお前でも女には全力はだせないのか？」

「…お前には全力を出したつもりだが？」

瑠奈は以前、御酒と地下闘技大会で一戦をしているが、その場では瑠奈の力の暴走があつたが御酒は圧倒されていた。御酒は少し冷や汗をかいていたが、それを隠すように瑠奈を嘲笑う

「あのときはあのととき、今は今よ。騙し討ちにはなるけど、これは殺しあいな。悪く思わないでね！？…行け！」

そして御酒は機械兵に指示を出すと、周りに居た機械兵が瑠奈と重山に接近する。重山と瑠奈は背中合わせに立つ

「…何を言いたいか、分かるな？」

「分かりたくない」

「文句を言うな、今この状況で個別で勝てるかよ？」

るなと重山はこの場に及んで喧嘩を始めた。その二人にさらに機械兵が近づくと

「…飛鳥と同様に強情だな、お前」

「黙れ烈火！！貴様が姉を愚弄するのは許さん！！」

「目の敵にされる意味はいまだに分からねえが…このままじゃ決着はつけられねえ」

「シネツ！！」

その場の重山と烈火に機械兵が向かい剣を振り下ろす。だがここで重山と烈火の怒りが頂点に達した

「うるせえええつつ!!!」

そして機械兵に対し、重山は拳で機械兵を粉碎、瑠奈は刀で切り落とした。その様に御酒が狼狽する

「んな、んななあっ!?!」

「邪魔だ」

重山は重力の力を解放し、重力を力に変えていた

「…悪いな、御酒。こんな機械兵ごときで俺は止まらない。…起陣」

瑠奈は地面に魔方陣を産み出し魔石の力を解放し、炎の力を増幅した。イフはそれを確認し、瑠奈に語りかける

「烈火、今のお前の身体の状態じゃ多分もたない、それでも使うの?」

「…」

イフは瑠奈が気にしている事を言った。瑠奈の怪我も軽くはなく、重山との戦いで消費していたのだから。だがイフの心配をよそに瑠奈は笑い、答える

「少しくらい能力が枯渇しても構わない。イフ、悪いが俺の力を…」

「はいはい、わーっつたよ!!! かいほーう!!!」

そして瑠奈の身体から能力がさらに溢れる

「…この力…前の時の比じゃ…」

「”グラビティ・フィスト”!!!」

御酒が瑠奈に気をとられてるうちに重山が機械兵を掃討にかかる。

そして御酒への道が開け、重山が瑠奈に檄を飛ばす

「行けよ貴様ああっ!!! 力をしめせっ!!!」

その道を瑠奈が一気に駆け抜け、御酒の場所にたどり着いた矢先に瑠奈が刀を抜こうとしたが御酒は一步早く銃口を瑠奈の額に突きつけた、そして二人の動きが止まる

「んくく…貴様もここを撃ち抜かれたら死ぬよなあ?」

「…」

「死ねえ!!!」

そして銃が放たれるが、その瞬間瑠奈は消えた。陽炎だったのだ。

そして当の瑠奈は…

「おおおおおっ！！！」

「！？何っ！？」

瑠奈は上空だった。大きな炎弾となって御酒に一直線だったのだ

「くたばれええっ！」

「そ、そんな…うわあああっ！」

そしてその炎弾は御酒を飲み込み爆発した。そして煙が晴れるとそこには瑠奈の姿があった。そこに機械兵を倒した重山が歩み寄る

「…これが、お前の力か…」

「…」

瑠奈の反応が無い、そこに違和感を覚えた重山は瑠奈の正面に立つ
「おい貴様、無視とはいいいい…、！？」

だがそこで重山は気付いた。瑠奈の目が真っ赤で、苦しんでいた。
そして…

「…あああああああっ！！！」

その場で叫ぶと、倒れ身体を擦るようにして苦しみだした

「熱い…身体がっ…燃えるように…っ！！がっ…あああああっ…

！」

「…っ！何が…どうなって…」

「やれやれ、間に合わなかった…」

そこに聖澤、灼沢、大門が現れた。重山は三人を見渡し、真剣な眼差しで三人に聞く

「…今のこいつに、何が起きてるのか分かるのか」

「さてね、私には分からないけど…非常にまずい状態であると言うことはたしかね」

聖澤が重山と話す間、灼沢は急いで瑠奈の所に歩みより、大門が作った門に瑠奈と共に入っていった。門の行き先は当然新組織であろう

「…」

「貴女も感じたでしょう？あの男の強さを」

「…ああ、恐ろしかった。あれほどの力を軽く引き出している…私

「じゃ、絶対に勝てないって位にね」

「そう、彼は強い。今地下に居る能力者1と言ってもいい位にね。でも、それ故に彼は諸刃の剣…丁寧に扱わなきゃすぐ壊れる…」

「今が…その瀬戸際だと、アンタは言いたいのか」

「重山の妹さん？強さは…脆さと隣り合わせなの。彼はそれを知ってる。なのに彼は自分の力を最大限に使った。これは何故だと思う？」

聖澤の質問に重山は眉を潜め、顎に手を当てて少し考えた、そして出た答えは

「…姉の、為？」

「そうよ、瑠奈は貴女の姉の為に力を使った。貴女の姉は、まだ貴女にこの世界で生きてほしい、そう願ってる筈だって思ってたね」

「…姉は、生きたくても生きれなかった。まさかそれを…アイツは負い目に？」
「かも知れないわね。自分自身に力があればお姉さんを守れたかも知れないって」

「…」

「それでも貴女は、烈火はお姉さんを見殺しにしたと思うの？」

「…いや」

重山は神妙な面持ちで聖澤に否定する。烈火に対する誤解は解けたようだ

「じゃ、ここからは私たちが撤退を援護よ？」

「…撤退？一体どういう…」

重山が辺りを見渡すと、先程倒した機械兵がまた動きだし、辺りを包囲していた。どうやらコアを破壊しないと再起動するようだ。聖澤は大鎌を構え、口許を緩ませる

「じゃ…久々に大暴れさせてもらおうかしら？」

「…二人でやるのか？」

「いや、まだ居るよ。なあ？…零！」

すると上空から銃撃が起きる。その方向を重山が振り向くとそこに氷の翼をはためかせた零が居た

「…全く、人使いが荒いな」

「うるさいわね零。文句言わないで手伝いなさい！」

「…貴方は…氷の…」

「零冬児、姉から話をきいてるか？」

「…凍てつき銃撃手、とね」

「ふん、まあ構わんが…まだ居るぞ」

「だらつしやあああああつ！！」

「”疾風閃”！！」

さらに横から葉っぱの矢が飛んできて機械兵を穿ち、そこに男が飛び込み拳を機械兵にぶちこみ吹き飛ばした

「…風に、木の…守護者か??」

現れたのは双葉、風野だった。二人はすぐに重山の傍に向かった

「こいつが飛鳥の妹か、聖？」

「そ、似てるでしょ？」

「…慣れ慣れ…」

「あー、言うな言うな！俺は元々こんなだからな！！」

「貴女が重山の妹ですね？私は双葉、忍びに生きる木の能力者」

「…忍…、貴女達は…なんて言う集団…」

重山があっけに取られる中、聖澤が笑顔で答える

「私たちは…そうね、物好きなお人好しの首長を持つ…物好きな存在かしら？」

そして機械兵に向けて各人が攻撃を開始する。重山は少し出遅れるがすぐに拳に重力の力を固め、突撃を始めた

「…戦い終わったら、新組織、行ってみるか！行きますっつっ！」

〓 新組織 〓

「道を開けてください！！兄さんの状態がまずいんです！」

「悪いが手が空いてる人は瑠奈の手当てと、瑠璃様をよんできてく

れ！迅速に頼むツスよお！」

大門と灼沢は瑠奈を肩で担いで救護室に急いでいた。瑠奈は未だに身体中が熱いらしく、冷や汗をかきながら苦しんでいた

「うう…あああっ！」

「に、兄さん！もう少し、もう少しだから！」

「こ、ここツスね！」

そして大門が救護室のドアを開けるとそこにすぐ瑠奈を寝かせる。

灼沢はタオルを濡らし、すぐ瑠奈の額に乗せた。瑠奈は荒い吐息を漏らしながら悶え苦しんでいた

「ど、どうしよう…兄さん！兄さん！！」

「正直俺たちじゃ手に負えないツス…瑠璃様は！？」

「何事ですか！！」

そこに瑠璃がやって来た。瑠璃は部屋に瑠奈が苦しんでいるのと、灼沢たちの慌てぶりで状況を判断し、すぐに瑠奈の元に駆け寄る

「あああっ…熱い…熱いいいいっ！」

「…灼沢さん、大門さん。重山は？」

「え、えと、今は所属不明の機械兵と戦闘中との事です！そこに私たち新組織の戦力も居ます！」

「灼沢さん、慌てなくてもいいですから、かしこまらないで下さい？」

「は、はいっ！！」

灼沢は深々とおじぎをする。それに合わせ大門もおじぎをし、それを見た瑠璃が苦笑する。だがすぐに表情は暗くなり

「二人とも、そちらの援軍に行ってください。そして片がついたらその場に居る全員に新組織に来るように伝えてください。…お願いできますか？」

「…わ、分かりましたツス！瑠璃様の指令は絶対遂行するツス！」

「わ、わわわ私も頑張るっ！」

そして大門と灼沢はその場を急いで後にした。そこには苦しむ瑠奈と瑠璃の二人が残される。瑠璃は瑠奈の手を握りながら涙を流して

いた

「…瑠奈さん…ごめんなさい…ごめんなさい…」

「熱い…焼ける…あああああっ!!！」

瑠奈のこの状況は果たして何が原因なのか…そして謎の機械兵は何者なのか、御酒の目的は…？

10話…亡き友に捧ぐ、弔いの炎（後書き）

「ちよいちよーいっ！！どーして私の本編の出番が激減してるのおっ！??…あっ！皆さんお久しぶりです、日向だよ 次回はサブストーリーなの だからその予告をしに来ただけど…こんな美少女を予告に使うなんて、筆者も贅沢よね?…え？読者には君の容姿は分からない?うるさいわね…それは読者の想像にお任せ、それでいいじゃない！あ、話が脱線しちゃったけど、サブストーリーの話ね！今回は一期の最終話のあとがきにあつた『地下野球大会』の話よ！瑠奈達は瑠璃の願いを叶えるため野球大会に出場することになったんだけど、皆素人ばかり。果たして瑠奈達は試合に勝てるのかな?って言う感じよ?その次はすぐに本編に入るから楽しみにしてて そのころには多分私も出るから、期待しててね じゃ、次行ってみよ」

『サブストーリー…駄弁る、その1』

この話は基本会話のみです。読者の妄想を働かせて、楽しんでください。

テーブルを囲み、とある男女四人がお茶会（という名のグダリ）を開いていた

「…なんで俺がこの輪に入ってたんだ？」

俺、烈火瑠奈はケーキを食べながらそんな事を呟く。…うん、うまい

「良いじゃない？時には変わったメンバーで話すのも重要よ？」

左隣に居るのは…聖澤聖。…瑠璃じゃねえのかよ

「…私の本編での出番は、今まだ無いのに…」

右隣は泉野弥枝。…確かに最近はこの扱いがずさんだよな、著者よ

「…最後の一人が、私つてのもまたなんか不思議ね？」

そして正面には夢村未来。夢村は俺にウィンクしながら微笑みかけてきた。…なんなんだよ、この面子

「あら烈火君？本当に不満なの？」

「そーいう訳じゃあないが…なんだってこの面子なのかが謎なんだよ」

「…特に私、だよな。瑠奈？」

「別にお前だけじゃねえよ。聖澤も夢村も、俺からしたら謎だ」

「私も同意見だ。私じゃなく瑠璃がこっちに来れば良かっただろうに…まだ別の場所で同じような事をやってるらしいな…、お、このケーキおいしいな…」

「あら、聖さんがそんな事いうとは思わなかったわね…今回は灼沢さんと日向さんの共同作業で作ったらしいわよ？」

「…香恋も、二期では出番が…」

「まーまー、泉野さんも日向さんも、これから出番ありますよ？…」

きつと」

「夢村、それは慰めてるのか？」

「あら、聖さんには慰めに聞こえなかったのかしら…困ったわねえ」

「…あー、そろそろこの雑談会の意味を聞かせてくれねえか？」

ダメだ、この雑談会じゃ俺の存在感が薄れる。早く話を本題に聞かなければ…

「ないよ」

「…ない」

「ないわね？」

オイ

「ちよつと待て、意味が無いわけないだろ？」

「だから、無いって。…強いていうなら、不思議なグループを筆者は作りたかつたんじゃないかしら？」

「…筆者は私に、出番をくれたんだと思う…」

「ん〜…、これは烈火君との恋愛フラグかしらね？」

三人が各々に自由に話をしてる。…ああ、最近の面子（瑠璃、灼沢、風野、有音）の方が話しやすいつてのが今回思い知らされたな

「…作者も余計なことしてくれるぜ、全く…」

「あら、そうかしらね？」

「？はあ？」

夢村、聖澤、泉野は知らぬ間に話すのを止め、こっちに微笑みかけていた。…な、なんだよ、何なんだよ…

「…考えてることは、同じ」

「そうみたいだね。…聞いてみようか？」

「うふふ…烈火君、覚悟はいいわね？」

「な、何だ…？」

「…この三人の中で、一番好きな子は誰？」

「…何いつ！??？」

吹いた、吹いたよ。さすがにそんなことをいうとは思わなかった。つうか、そんな事考えた事ねえな

「さあ、誰？」

「…瑠奈、正直に」

「ふふ…楽しみね？」

「…うう…」

容姿の好みは夢村かな。大人な女であつて、どこか謎なオーラがあつて…。だけど内面なら泉野、聖澤も捨てられない。泉野は寡黙ながら思いやりがあるし、聖澤も仲間になりたいの想いは熱いものがある。…ん…

「それって優劣つけなきゃダメなのか？」

「…駄目」「」

はい、拒否されました。…くそ、しゃあねえか

「…この三人なら、夢村かな？」

「…そ」

「…瑠奈、大人が好きなんだ…」

聖澤と泉野が何故か肩を下ろしている。…え？

「ふふ…そう、私なのね…意外だわ？」

そう良いながらも、夢村はまんざらでも無さそうだ

「…そんなところで、この話を終わりますしょうか？」

…え、終わり!?

「じゃ…今日のお茶会…」

「…おしまいっ」「」

皆が目元でピースをする。…終わりがよっ!!

11話：理解

「ロストキャツスル」

「これで…ラストおおつ！！”撃拳”！！」

そのころ重山達はロストキャツスルに居た機械兵を掃討し終わった所だった。全員が能力を消し、重山の元に集まった

「…落ち着いたところで、重山の妹さんに改めて自己紹介としようか？俺は風野真人。風の守護者で今は新組織に所属だな」

まずは風野が重山に握手を求めた。重山も礼儀が分かっているように握手を返した

「…私の名前は双葉陽子。木の守護者。新組織の忍よ」

「…零、冬児。氷の守護者」

続いて双葉、零と握手をする。そして次は聖澤だが…ここで聖澤に対し重山は意外な行動を取る

「私は聖澤聖、私も…」

「違う、貴女は違う」

そういうと、重山は聖澤に対し拳を突き出した。だがその拳は殴るためでは無く、聖澤に敬意を表すためだった。聖澤の顔の前で止まった拳に、聖澤はその手を握った

「…私に敬意を示して何になるの？」

「姉は貴女の妹、光瑠璃に仕えていた。その様に私は貴女に仕えた
い」

「…ふん…私はそんなに大層な人間でも無いのに…」

聖澤は少し複雑な表情を浮かべていた。聖澤は落ちこぼれの瑠璃が地下で選ばれたことを昔は気にしていたからだ。そこで聖澤は

「…だったら、今ここで少し試してみる？貴女が勝ったなら仕えたいわ。だが私が勝ったなら私に仕えるのはやめなさいな？」

「…いいでしょう」

そしてその場で重山と聖澤は武器を構えた

「…おいおい聖…、マジでやるのか？」

「あら、私は嘘は苦手よ？」

「…行くぞっ！」

そして重山が一気に間合いを詰め、拳を叩き込む。聖澤は鎌を使い攻撃を防いだが、重力の力で少し吹き飛ばされる

「…！？」

「私の力…簡単には破れない！」

「…かしら？」

だが聖澤も力の出し惜しみはしなかった。白い翼をまとい、鎌を構えて空から強襲にかかる。その鎌の一撃をかるうじて重山は受け止めるが…

「… かった」

「…！！」

そこに光が集まった瞬間、重山の身体を切り裂いた

「…っっ！！」

「… 光刃翼…：今を見抜けないならまだまだだね？」

「… うぐっ…：ま…まだ…」

「…今はそれどころじゃない！」

重山が再び立ち上がるうとしたところで、灼沢が剣幕で戻ってきた

「…まずいのか、灼沢」

「零さん、その通り。兄さんの容態が危険なんです」

「…原因は分かってるの？」

「詳しいことは、まだ…。ですが、熱いという言葉を連呼している辺り…」

「…あいつの力、炎の暴走…か？」

「はい。そして…瑠璃さんから招集命令が来たよ。地下の勇士達に来てほしいって」

そして灼沢は事前に瑠璃に渡された名前を読み上げていく

「風野真人、零冬児、双葉陽子、灼沢紗菜、天鳳院琉季、有音渚、明源愛、夢村未来、聖澤聖、天導誘貴、大門斗真、そして…重山雲。以上を地下代表、光瑠璃の名の元に呼び集める。…だそうです」
重山は驚いていた。自分自身の名がそこにあつたからだ

「…では、行きますよ皆さん！新組織へ！」

そして重山達は大門が産み出した門をくぐり、新組織へ急ぐのだった

「新組織、瑠璃の部屋」

「…」

「大分落ち着いた見たいですね…ふう…」

その頃、瑠璃は未だに瑠奈の看病を続けていた。その看病が功を奏したか、瑠奈の容態が次第に安定してきたが、未だに意識ははっきりしていないようだった。その部屋に夢村が来る

「夢村さんですか…」

「どう、瑠璃ちゃん？烈火は少しはよくなった？」

夢村は瑠璃に気を使いながら接しているのが丸分かりだった。瑠璃もそれに気付いていて、気丈に接している

「…はい、先程からは苦しまなくなりました」

「そっか…なら大分良くなってるのかな…？」

「それはまだ何とも…とりあえず、瑠奈さんの力が未だに放出されっぱなしなのが心配です」

瑠奈は能力が解放されたままだった。瑠璃はこの状態が危険に繋がっているのは分かつては居るが、対処が分からず困っていた

「とにかく、今度は私が看てるから、瑠璃ちゃんは少し休んだら？寝てないんでしょ？」

瑠奈が倒れてから丸一日が経とうとしていたが、瑠璃は不休で看病をしていたのだ。瑠璃は苦笑を溢しながらも

「では…お言葉に甘えて…」そういい、自分のベッドに横になった。その状態で夢村は話を続ける

「烈火つて真面目よね。誰の為に命張って、正義を気取らないけど、何だかんだ正義感強くて、困ってる人が居たら、何だかんだ断れなくて…」

「でも、それが瑠奈さんの…」

「いいところなんだけど、瑠奈は自分の負担を無視して行動するから、寿命削ってるよね？」

「あ、…確かにそうですね？」

「まー、それもまた瑠奈らしいんだろうけどさ？瑠璃ちゃんの事を考えたなら瑠璃ちゃんが可哀想で可哀想で…」

夢村が泣き真似を交えながら話を続けている。瑠璃はそれを苦笑を浮かべながら聞き続けていた

「烈火は、瑠璃ちゃんの為に剣を取ってる。でも私から見たら、烈火は」

「命を捨ててるようにしか見えないよね、どうも」

「…！」

不意にこえがしたかと思いきや瑠璃は後ろを向くとそこにコーヒーカットプを持った天導が居た

「あ、貴方…なんでここに!？」

「あれ…困ったね、どうも…。ここら辺で能力が放出されてるのが感知出来た…が、表の理由かな？」

瑠璃の質問に天導は含んだ言い方で答える。それに苛立ちを覚えた夢村が食いつく

「あら、でも貴方には関係ないんじゃないかしらね？」

「ふっ…確かにそうだ。君…夢村さんの言い分はもつともだよ。だけれどいずれ私も呼ばれるのであろう？瑠璃？」

「っつ」

瑠璃は凶星だったように天導からめを背ける。夢村は少し驚いていた

「じゃ、ここに来るのは…」

「運命、とでも言おうかね、どうも…」

そして会話が終わり、天導が切り出す

「とりあえず、機械兵の掃討は完了、全員帰還したようだよ、瑠璃」
「…では、皆さんを会議室に集めてください。これからについて…
話をします」

瑠璃の目は覚悟を映していた…

12話…それぞれの始まり

「新組織、会議室」

「…わぁ…皆さん…」

瑠璃が会議室に入ると、瑠璃の知人ではあるが沢山の能力者が顔を連ねていた。瑠璃はその輪に入り、会話を始める

「灼沢さんに、風野さん、有音さん。ご苦労様です」

「あぁ…俺にとつちゃあんな仕事、取るに足らねえよ」

「私も平気…だって兄さんの為だから！」

「私は真人に力を貸してただけだから…そ、その…何も…」

「とりあえず、ご苦労様です 貴殿方が頑張ってくれたお陰で、戦力が整いそうです！」

「？戦力って…」

瑠璃は灼沢の言葉を遮り、壇上に立つ。そしてその場に居る能力者達に語りかけ始めた

「…え、皆さん。私の呼び掛けに集まって頂き、ありがとうございます
いました 皆さんの知っている通り、今地上、地下共に復興の一途を辿っています！」

「…堅苦しい挨拶はよそうぜ、光！さっさと本題入ろうぜえ！」

この会議に風野が茶々を入れるが、有音に怒られ引き下がる

「…ですが、今回の一件もそうですが、最近その平和に陰りが出てきました。そこで…」

そして瑠璃が力を込め、本題を切り出した

「今回集まっていた皆さんに、新組織の防衛、今回の事件について検証、地上、および地下で起きた事件の解決、事件の根元の解決をチームを組んでやっていきたいと思いますが…皆さん、いかがですか？」

瑠璃は今回の事件を重く捉え、皆にこれを解決するために助力を求めたのだ。そして瑠璃はそのまま重山零の前に立つ。重山は何が起きるか分からず焦っていたが、瑠璃は重山に握手を求めた

「重山零…さんですね？私は光瑠璃です」

「…光…」

「貴女の姉…飛鳥にはとてもお世話になりました。そして…飛鳥を死に至らしめたのは、私の力不足が原因でもあります」

「…」

「でも…私はそんな貴女に期待します。それと…私は飛鳥への恩返しのために、貴女を守っていきたい」

そして重山の手を取る瑠璃。重山は気恥ずかしいのか目線を逸らしていた

「重山さん…力を貸してくださいますか？」

「…あ、ああ…うん」

そして重山の了承を得、瑠璃は隊の編成を始めた

「まず、今回の件の調査を零さん、明源さん、双葉さんをお願いしたいと思います」

「…仕方ない、か」

「おにーちゃん…やる気出せよう」

「私は零殿と明源殿がペアか、よろしく頼む」

「地上での事件の解決は灼沢さん、聖澤さんが行ってください」
「…え？また変なペアだね？」

「そして申し訳ありませんが、地上は日向さん、泉野さんと合流して事を運んで頂けますか？」

「ん…まあ、仕方ないか」

「地下の事件について風野さん、有音さん、天鳳院さんが当たってください」

「また戦力を分散させたもんだなあ…」

「ぶつくさ言わないの、真人。手一杯なのよ？」

「あ…分かってるよ、渚」

「そして新組織の防衛はここに居る兵隊さんと…夢村さん、瑠奈さん、重山さんをお願いします。…では、各員の奮闘を、期待します！解散！」

そして各々が移動を開始し、場が静かになったところで夢村が瑠璃に話を切り出す

「…瑠璃ちゃん、正気？今の瑠奈を戦力に加えるなんて…」

「その質問には、本人が答えますよ？」

瑠璃が1つため息をつき、後ろを指差す。夢村が振り替えるとそこには瑠奈が立っていた。まだ体調は回復してないらしく顔色が悪かった

「…あんた…」

「こー言うことだ夢村…俺も…出るぜ」

「んな事言ったって、今の貴方じゃ…」

「分かってる…けどな…自分の能力で死ぬくらいなら、なんとか瑠璃達の力になってから死にたいんでな…」

「だ、そうですよ、夢村さん。…私が言っても止まらないです」

瑠璃の言う通り、瑠奈の目は疲労から濁ってはいたが覚悟が見えていた。夢村もそれのため息を吐き

「仕方ないわね…まあ、重山さんも居るでしょうから、なんとかするでしょう？」

「…でも瑠奈さん？とりあえず後3日は静養してください。良いですわね？」

「…確かに俺も、すぐには…動けねえよ」

「それが良いだろうな。貴様が死ぬと姉さんが浮かばれないからな」「とりあえず当分は烈火君と新組織の護衛ね」

「はい。夢村さん、重山さん、瑠奈さん…。よろしく、お願いしますっすっ！」

瑠璃は三人に対し深々とおじぎをした。それに対し三人は笑って返したのだった…

「新組織、正門前」

零、有音、双葉の3人は新組織正門前には事件の調査の為、決意を口にしていた

「…」

「おにーちゃん…まだ不機嫌なの？地下の為にがんばろーよう…」

「大丈夫ですよ、明源殿。こつみえても零殿はちゃんと依頼をこなす人です」

「…双葉」

「お互い共通の仕事です。頑張りましょう？」

「…仕方ない、か」

「がんばろーっ！」

「地上へと続く門前」

灼沢、聖澤、天導は大門の所に赴き、大門が生み出した門に行く準備をしていた

「私は地上組…久しぶりに日向さんと泉野さんにも会えるんだあ…」

「灼沢。悪いけど再会をよろこぶ事は無理そうだよ」

「ふ…聖。固くなるなよ。灼沢さんには楽しみなんだからな」

「…早く終わらせて、早く兄さんの所に向かうんだ…！」

「昇降エレベーター前」

昇降エレベーター前には風野、有音、天鳳院が準備を終え、一時の談笑をしていた

「…これでよし、と」

「真人？何を用意して…」

「マンガ肉に、籠手、爪、木刀、マイクかな？」

「ま、マンガ肉？な、何のために…」

「あいつの為だよ」

風野が指を指した先にはマンガ肉（絵で書くような骨付き肉である）

にかぶりつく天鳳院が居た。天鳳院の顔は綻んでいても幸せそうだった。名を呼ばれ、笑いながら振り替える

「…ん？どした、風野？」

「…幸せそうだなあ…天さん」

「うん、幸せ。風野、食べるか？」

「要らね」

「じゃあ、有音は？」

「わ、私…、す、少しもらって…いいですか？」

「ん、食べな。」

そうしてマンガ肉をもらう有音。それを頬張ると、有音の口も綻んだ

「お、おいしい…」

「マンガ肉は、一番、おいしい。有音、分かってくれた？」

「…おいしい、天さんに渚？そろそろ出発するぜ！」

こうして4つに部隊を分け、瑠璃達地下の住人が新たな敵に向かい始めるのだった…

「新組織」

「ゼエ、ゼエ…。熱い…くそ…」

「ねえ…早く休まなきゃ。今の瑠奈じゃあもたないよ…力に飲み込まれるよ？」

「うるせえよ…ゼエ…ゼエ…。俺の身体なんだ…、少しは自由に使わせやがれ…」

「そんな事言っても…」

「それより…、イフ、お前は狙われてるのか？」

「…分かってるんだね、瑠奈には…参ったなあ」

「俺が雷の力を使ったとき、お前以外の精霊が…出なかったのな。大方そいつら…捕まってるんだろ…？」

「あー、そこまで？…もう、さすがは瑠奈だなあ…。うん、そうだ

よ。私と同じ能力の精霊達は皆、敵に捕まってる』

「残りの1つを手に入れた俺は自然と狙われる…、それくらい分かってたさ」

『…ねえ、瑠奈。皆を…助けたくないかな…？』

「言われずとも…やってやるさ…ゲホッ！」

『…!!吐血…』

「…ちっ…少し、部屋で…寝るか…」

13話：防衛戦

地下組織で再び隊が組織され、ロストキャッスルにて襲撃を行ってきた機械兵の軍団に対する処置を行い始めた。瑠奈、重山、瑠璃、夢村の4人は新組織に残り、機械兵の襲撃に備えていた。ただ瑠奈、重山は手負いの身、瑠璃は力を何らかの理由で使えない状態だった…

「新組織、救護室」

「…」

「やはり無理が祟ったようね…」

瑠璃、夢村は救護室で眠る瑠奈の看病をしていた。会議後瑠奈が通路で倒れていたのを聞かされた夢村達が運んできたのだ

「…申し訳ありません、夢村さん」

「いやいや、瑠璃ちゃんが謝る場面じゃないわよ？むしろ烈火が無理をしすぎなのを責めたいわね…」

「…」

「正直な所、この戦力状況じゃ新組織は制圧されるわよ？うちの部隊の力は能力者には到底及ばない、当然機械兵にも…」

「でも、これくらい戦力を分散する位の警戒は必要だと思ってます」

「…何か、心当たりでも？」

夢村が怪訝そうに瑠璃に聞くが、瑠璃はうつむきながら首を横に振るだけだった

「…やっぱり、戦力をもう少し集中すべきだったんじゃない？」

「んな…必要はねえ…」

すると瑠奈が目を覚ました。瑠璃は少し笑顔を取り戻したが、すぐに瑠奈の言葉の真意を確かめる

「…どういう事です？」

「簡単…さ。俺…重山…夢村。3人でカタがつくレベルだ、あの機

械兵は」

「…でも今、この新組織にはこの3人しか…」

「…だがな、仲間の兵が沢山居るなら戦況は…変わる」

「…仲間を、犠牲にするつもりですか」

瑠璃の目が険しくなるが、瑠奈は構わず続ける

「無論…殺させはしない。ただ…俺らが抜かれないようにしなきゃな」

「…ということは烈火、まさか私たちで切り込み、後ろは任せると？」

「…今に見てる」

「瑠璃様あつ！！」

そこに義兵が慌てて入ってくる。瑠璃は驚いていた

「な、何ですか！？」

「き、機械兵の集団です！！まっすぐこちらに攻めているとの事！」

「…烈火、まさかこれを予知…？」

「さあな…夢村、出るぞ！瑠璃…お前は悪いが室内待機だ！」

「…は、はい！」

瑠奈がふらつきながら腰元に剣を携え向かった…

〓新組織、門前〓

「なんとか持ちこたえろ！！新組織をまもれえっ！！」

「…少し、押されてるか…」

瑠奈達が向かったところには機械兵は既に新組織に到達、義兵と戦闘を繰り返していた

「烈火にしては随分のんびりな発想ね？これは圧倒的不利にしか見えはないのだけれど？」

夢村の言う通り、戦線は大分下がり、新組織の門前まで機械兵が押し寄せてきた。重山はどうやらこの戦線には加わってはいないようである

「…重山の奴、どこに行ったんだ…、つとー！」

すると瑠奈と夢村の場所にも銃弾が撃ち込まれる。どうやら気付か

れたようだ

「…目、つけられたみたいだけど？」

「任せろ」

すると瑠奈は炎の力を強める。さらに機械兵の注意が瑠奈に寄っているのが確認できた

「…?」

「夢村、義兵には門前まで戦線を下げて、機械兵の侵攻を許すな、と伝えてくれ」

「?どういう…」

「こうだ！」

すると瑠奈は一気に駆け出し、機械兵の間を抜けていく。機械兵はそれを追っていく

「!? 烈火、お前の今の状態じゃ振り切れ…」

「…んなことあどうでもいい! 行くぜえっ!」

すると瑠奈が急に立ち止まり闇の炎に包まれる。すると…

「酷・浄(こく、じょう)!!!」

瑠奈が機械兵に向かい炎の珠になって突進、すると機械兵はその炎に飲まれ次々消えていった

「…!!!」

「夢村あつ! ポケツとしてんじゃねえ!」

「! あ、ああ!」

夢村も爆弾を取りだし機械兵に放つ。機械兵はその爆風で破壊されて行く。そして15分後には完全に機械兵を掃討するのだった…

「…ハアツ…ハアツ…」

瑠奈は疲労が如実に現れるかのように荒い息をしていた。それが心配になり夢村がすぐさま瑠奈の所に駆けてく

「烈火: 貴方大丈夫?」

「…心配…ねえよ」

瑠奈は凄い量の汗を流し、剣を杖にすることでやっと立っている状態だった。夢村はそれを見かね、周りにいる兵士に瑠奈の護送を要

請した

「悪い、烈火を瑠璃ちゃんの部屋へ運んで貰えるかしら？」

「は、はあ…ですが、夢村様は？」

「私？私は…すぐ向かうわ。それより、早く烈火を。あれじゃあ休むに休めないだろうし…」

「ゆ、夢村！？おま…」

瑠奈が何かを言おうとしたが、兵に肩を担がれ組織に連れていかれた。それを確認した夢村は…

「…そろそろ出てきなさいよ？」

「…あら、私の存在に気付いてたのかしら？…でしたら、坊やを連れていったのも納得ですわね」

茂みに向かい夢村は話しかけた。するとその茂みから御酒が現れたのだった。御酒は不敵な笑みを浮かべながら銃を構える

「私を撃つ気？どうやら、貴女はずいぶんな自信家のようね？」

「貴女こそ…、能力者の素質もあまりない出来損ないの癖に、私の前に立ちただかるつもりですか？いや…実におもしろくないですね？」

御酒と夢村の舌戦が続く。

「私は少し特殊なの。貴女方のように変な力しか使えないタイプには負けませんわよ？」

「…ふふっ、夢の力…侮ると怪我するわよ？」

すると御酒が銃を発砲する。夢村はその銃弾に撃ち抜かれたように見えるが…

「！！？」

「うふふふ…」

夢村の身体がその場から消えていく。だが夢村の声だけは御酒に届いていた

「…小癩な…」

「私の力の一端…見せてあげるわあっ！！」

そして夢村が御酒の目の前に現れ、驚く御酒の顔に手を添え…

「天夢”！！」

衝撃波を放ち、御酒を吹き飛ばした

「…あら、加減が必要だったかしら？」

「うるせええっ！」

だが御酒も意識はつきりしていたようで、体勢を建て直し夢村めがけてバズーカを放つ。だが…その砲弾は夢村の目の前で止まった。御酒は狼狽してさらに撃つが、全てが夢村の前で止まっていた

「…な、な…」

「馬鹿なのかしら？…こんな遅い砲弾で私を撃ち抜ける筈が無いでしょう？」

夢村はその砲弾に何かの力を加える。すると砲弾は全て夢村の足元に散らばった。夢村は魔女の如き笑顔で御酒に近づく

「私は魔女：貴女なんか、私は負けないわ？…see you again？」

「！！！」

そして次の瞬間、夢村が衝撃波で当たりを飲み込んだ。…だが御酒を倒すには至らなかつたようで、既にその場から逃げた後だった

「あら：最高のおもてなしを受け取らずに消えちゃいましたか…」

まあ構いませんがね？それより…烈火の方を心配しますか…」

夢村はそのまま足を新組織に向けた…

「新組織」

「れ、烈火様！？危険です！！」

「うるせえ！…なんとかなるってんだよ！」

瑠奈は周りの義兵を退け、自力で自分の部屋に向かおうとしていたが、視界が歪み、全身に疲労が襲いかかる今、瑠奈にまともに歩力すら残されてはいなかった。瑠奈は壁つたいに一步ずつ進む

「…はあ…ぜえ…」

「生まれ、烈火瑠奈」

「…邪魔…だ」

そんな瑠奈の前に重山が立ちふさがった。重山は力を解放し、力づくでも瑠璃の部屋に連れていくつもりだった

「…おとなしく、光さんの部屋に」

「…あいつに、迷惑を掛けっぱなしじゃあ…嫌なんだな…」

「ふ…姉さんの言う通り、本当にひとの気持ちを読むのが下手なんだな」

そういうと重山は力を消し、瑠奈の肩を担いだ。瑠奈はその行動に呆気を取られていた

「…！？おま…」

「姉さんが光さんの為に尽力していたのなら私も同じことをするまで」

「…変なところで律儀だよなあ…重山の家族は」

瑠奈は苦笑する。よもや重山の妹の指示を聞くことになるとは思っていなかったようだ

「…行くぞ」

「ああ、仕方ねえな…世話焼きが多いもんだぜ、このチームはよ」

「それは貴様とて同じだろう？…烈火」

「ははっ…違いねえわ」

そうして重山に肩を担がれ、瑠奈は瑠璃の部屋へ向かった…

＝瑠璃の部屋＝

「もう…何でまた無茶をするんですかっ！？」

「…すまねえって…」

瑠奈が瑠璃の部屋に来た瞬間、瑠璃に凄い剣幕で「そこに座ってください！」と怒鳴られ、現在説教をされていた

「まだ瑠奈さんは戦える状態じゃないんです！それくらい自分で分かってくださいっ！」

「ま、まあ…、光さんも落ち着いて…」

「うるさいよっ、重山っ！」

「うっ」

まさかの重山は瑠璃に気圧され、さらに瑠奈に説教を続け、そして説教が終わると…

「…瑠奈さん、とにかく無事で良かったです」

「遅れを取る相手じゃなかったから問題ねえよ」

「そうね…あ、帰還よ、瑠璃ちゃん」

夢村もその場に戻ってきた。夢村はそのまま会話の輪に入ってくる

「瑠璃ちゃん、今回の戦いは結構厳しいかもしれないわよ」

「？それってどういう…」

「簡単よ、敵も能力者。それも…私たちを知る相手みたいね？」

夢村と御酒は面識が無かった為御酒の名前は出てこなかったが、夢村は悟ったようだった

「…そうですか…」

「まあ、相手にとって不足は無いわね。…今の戦力じゃあいずれ押しきられるでしょうけど…」

「とりあえず、今はこの戦力で抑えるしかないだろうな…」

瑠奈はまだ引かない汗を拭いながら、これからの戦いを見据えていた…

14話…再編成、だが…

「新組織、瑠璃の部屋」

「瑠璃様、お食事をお持ちしました」

「ありがとうございます。そちらにおいていただけますか？」
機械兵を退けた後一週間、これといって何もないうまま過ぎ、瑠璃の容体も安定してきた。今は瑠奈と瑠璃が共に昼食をとっている

「…瑠奈さん、起きてくださーい」

「…ん…昼…か？」

「んもう…体調は宜しいんですか？」

「まあな…。つか、何で俺は寝かされてんだ？」

「まだ瑠奈さんは無理しちゃ駄目だからです！さあ、ご飯食べましょう？」

「…ふう…」

瑠璃は瑠奈の身を案じ、前線に瑠奈をつくのを禁じたのだ。今防衛線には重山、夢村が出ている

「…なんだかなあ、生きてる心地がしねえ…」

「むう…、でも、まだ瑠奈さんは万全じゃ…」

「…」

根本的に瑠奈の容体の悪化の原因は夢村が生み出した精霊「イフ」が瑠奈に憑依したことで起きていた。だがイフがあまり出てこなくなつた所で瑠奈の調子は回復していた

「…まあ、今は休むさ」

「はい…ところで瑠奈さん？」

「ん？なんだ？」

瑠奈は瑠璃に向き直る。瑠璃は目をぱちくりさせながら

「夢村さんから聞いたんですけど…瑠奈さんって、好きな食べ物甘いものなんですか？」

「…なっ!??」

あまりにも唐突だったが、瑠璃は素直に聞いてきたため、瑠奈は額に手をあてながら答える

「…ああ、好きだ」

「特には何が好きなんですか?」

「んぐ…、そ、それって今答えなきゃ駄目か?」

「駄目です。私の疑問ですから」

「お前はいつから急に自己中に…」

「答えてくださいっ」

瑠璃は満面の笑みで瑠奈に詰め寄る。瑠奈は観念し

「…モンブラン…」

「へえ…モンブランですか…」

瑠璃はその情報を聞くと、笑顔で瑠奈に告げる

「じゃあ、今度瑠奈さんが良いことしたらモンブラン、私作ります」

「はあっ!?!?…いきなり何を言い出してんだよ」

「作るものは作るんですっ!!決めました」

そこに、兵が入ってくる

「瑠璃様、瑠奈様。伝令です」

「伝令?…誰からですか?」

「」日光の守護者”からだそうですが…」

「香恋だな。で?」「はい。『事情は聞いたよ』じゃ、これから

弥枝と聖澤さん達と一緒に新組織向かうから」『だそうで…』

「地上では何事も無かったようですね」

「だな。…下がっていいぜ」

「…では、失礼します」

近々瑠奈の幼馴染みの日向、泉野が合流することとなった。その事実を聞いた瑠奈は少し考え…

「なあ、瑠璃」

「はい？」

「…もう一回、全員を呼び戻さねえか？」

「え…？なぜですか？」

瑠奈の発言に瑠璃は目を丸くしていた。瑠奈はそれを理解した上で続ける

「地上では何も無かった、だったら問題は地下だけだ。それなら戦力をもう少し集めて一気に問題解決していききたいと思うんだ」
瑠璃はその言葉を聞き、決意の眼差しで答える

「分かりました。戻ってくるように、地下放送を行います」

「？地下放送？」

「まあ、瑠奈さんは少し待っていてください。すぐ分かります」

そういい、瑠璃は部屋をあとにする。そしてすぐに、放送が始まった

『聞こえますか、地下の皆さん』

「…」

『機械兵が最近地下の平和を脅かしてる中、皆さんはいかがお過ごしですか？私は今回、ある指令を伝えるためにこの放送を行います。今、私の指示で動いている地下の有志の皆さん、一度その作業をやめ、新組織に戻ってきてください。そして地下の皆さん、これから平和に過ごしてください。共に手を取り、共に生きていきましょう。…また、近々皆さんの元に、私は現れますから』
そうして放送が切れる

「…たく、甘いんだかなんだか…」

「そうかしらね？」

「…こんな代表だから、貴方は仕えているのだろ？烈火」

「…夢村、重山…」

部屋には夢村と重山が戻ってきていた。部屋には笑顔が広がっている
「まあ、楽観的ではあるでしょうね？…あの笑顔は、純粹の塊だもの」

「姉さんがあの人に仕えていた理由、分かってきた気がする。…優しい方だ」

「…へへ、違いねえ。俺らは、そいつのお守りをするのさ。…荷が重い、いいものだ」

「…ふふっ やっぱり敵わないな、瑠璃ちゃんには」

そして再び新組織に能力者が集う…。戦いはここから激化して行くのだった…。そしてその夜…

〓 新組織、道場 〓

『 烈火…瑠奈…。私は…貴方を…殺す…。貴方の力は…あまりにも…脅威…だから…。イフリータ…帰っておいで…？彼に…取り込まれる…前に…』

『 ハッ！？ 』

「はあっ！やあっ！せえやああ！」

瑠奈は道場に足を運び、休んで鈍った感覚を取り戻すべく訓練を行っていた

「…？イフか？」

『 …あ、あれ？おかしいな…出てくるつもり無かったのに…』

「寝ぼけたか？」

『 ば、バカにするなよっ！？ウチがそんなんで出てくるわけ無いじゃん！』

イフは不機嫌そうに瑠奈から視線をそらす

「…どうしたんだよ」

『 …え？』

「俺を冷やかす為だけに出てくるほど、お前は安い人間じゃない…それは俺がよく分かってるからよ。なんかあるんだろ？」

『 …っ』

イフは見て分かるくらいの汗をかいていた。瑠奈はそれに気付き、イフに声をかけていたのだ

『 …呼ばれてる』

「呼ばれてる？」

『うん…』

「誰にだ」

『私、その呼ばれてる場所に行きたい』

「それは、この世界にある場所か？」

『ある』

「そこには、俺も居ないといけないのか？」

『うん、ごめん』

その答えに少し瑠奈は笑い

「つたく、らしくねえぞ、イフ。…だが、悪いが条件がある。戦力は俺一人だ…構わないな？」

『…黙って、行くの？』

イフの不安の目線に瑠奈は1つ間を置いて答える。その目には覚悟が映っていた

「多分だが…今回のその場所に行くことは、多分俺にとっても重要な事なんだと思う。だけどそんな俺の身勝手に他のみんなを巻き込みたくない。だから、だな」

『…優しいんだね、瑠奈は』

イフが目を伝う涙を拭い、笑顔を見せた。新組織からの援護無しにイフの行きたい場所へ赴く事になった瑠奈。果たしてそこで瑠奈を待ち受けるものとは！？

15話：知られざる真実

Ⅱ 第5階層・ミルドクライン Ⅱ

「っしやあああつ！」

瑠奈はイフを宿し、そのイフが行きたい場所があると言うことで、瑠奈はイフを連れその場所へ向かっていた。だが行く道中で機械兵と遭遇し、戦闘になっていた

『ちよ、そんなに飛ばして平気なの！？』

イフは能力を使うことによって変化する瑠奈の体調を心配していたが、瑠奈は笑ながら

「はっ！残念ながら心配には及ばねえ！今ここでこいつらを潰せば、後で楽になるんだしよおっ！」

そついで瑠奈は炎で機械兵を焼き払っていく。戦況は孤立無援の筈の瑠奈が機械兵の一団を圧倒していた。そして五分もしないうちに機械兵の集団は全滅したのだった

「…ふう」

『もうすぐつくけど…大丈夫？』

イフが心配して俺に聞いてくる。ちなみにイフは精霊なので能力者以外は見えない、よつて普通は瑠奈の独り言である

「なんつーか、体調はむしろここら辺に来てからは万全だな。気味悪いくらいだ」

『…やつぱりね…』

イフは瑠奈の返事を聞き嘆息が入る。瑠奈はその理由が分からなかった

「…？」

『…この森の奥に、目的地があるんだ』

「へえ…」

瑠奈とイフの眼前には広大な森が広がっていた。人工太陽の光を覆

い隠すような壮大な森だった

『封印の森…名はありきたりだけど、ここから感じてるんだ』

「感じてる？なんの話だ」

『…目的の、人がいる』

瑠奈はその言葉に耳を疑った。眼前に広がるのは本当にただの森、人が住んでいるとは到底思えなかった

「…人だあ？そんなまさか…こんな場所に物好きな」

『し、信じてくれないの？まあ…居るのは精霊の長だからね…』

「…何？」

また耳を疑った。イフ達のような能力を宿した精霊が存在するといふは言うのだからだ。瑠奈は疑問が山積みになったが、吹っ切れたように

「…仕方ねえ、乗り掛かった船だ。行くしかねえか？」

そういい、森に向かって歩を進めていった…

〓新組織〓

「…瑠奈さんが、居ない？」

そのころ、新組織では瑠奈が消えたことで大騒ぎになっていた

「は、はい！いろんな箇所の部屋を見てきましたが、どこにも…」

「瑠奈さんは、荷物は大体持ってますか？」

「は？…ああ、実は烈火様の部屋にいつも使う刀はあった、と…」

「刀を置いていった…？」

「その様子だと、どうやら機械兵絡みではないらしいな、光」

「重山…」

その場に重山が現れる。重山もその騒ぎを聞き、新組織周辺を操作していた。だが成果が上がらずとりあえず帰還したのだった。重山は剣幕で瑠奈を罵倒する

「あの熱血男が…面倒事をよく呼ぶ…」

「ち、ちよつと重山…。」

「同感だよ、あいつは基本面倒だし！」

「…烈火だから、仕方ない」

そこに、地上から合流した日向と泉野が入ってきた。二人は瑠璃に会釈をした後すぐに重山に向き

「だけど、それだから一緒に居て楽しいんだよ！」

「…貴女に、瑠璃を否定なんてさせない」

「…っ」

重山に対しきつく当たる。日向と泉野は元々瑠璃と地上で知り合いだった為、瑠璃の事をよく知っていた

「瑠璃ちゃん。この人は飛鳥の妹？」

「は、はい。重山嬢…飛鳥の妹ですね」

「…」

「飛鳥と容姿だけじゃなく、性格も似てるね？」

「…姉さんを侮辱する気か？」

「いやいや、別に馬鹿にしてる訳じゃないさ。ただ、ビックリするくらい似てるなあと…」

「…剛打”！！」

すると急に重山は日向に向かい正拳を放つ。日向はなんとか反応し槍で攻撃を防ぐが重山の力が強く、日向は壁に叩きつけられる

「…って…何すんだよっ！！」

「すまん、つい手が出してしまった、許せ」

日向が怒る中重山は涼しい顔をしている。どうやら重山は悪意があった訳ではないようだ。それを汲み取った瑠璃は日向をなだめる

「まあまあ日向さん、あれが雫の触れ合い方なんですよ」

「…!?」

「えー、こんな強烈なコミュニケーション取られ続けたら…命がやばいって！」

だがここで重山は目を見開いていた。瑠璃はすぐ気付き、重山に話しかける

「…どづしたの、雫？」

「ひ、光様…。私を…名で…」

「あ、それが…。うん、貴女のお姉さんも名前…飛鳥って呼んでたから、貴女も同じように扱うべきかなって…」

「…」

「だって、飛鳥も雫も…大事な仲間だから」

爽やかな笑顔を瑠璃は重山に振り撒く。その表情に重山は少し困惑していたが、すぐに瑠璃に向き直り、笑顔を返した

「…ええ、分かりました。では、私の事は雫で…」

「はい、これからもよろしくです、雫」

「…あー、瑠璃ちゃん？」

日向が少し気まずそうに話しかけてくる。瑠璃は慌てて日向に向き直る

「あ、そうですね、呼んだ訳ですよね？」

「それは分かってるよ。機械兵でしょ？」

「…え？」

そこで泉野がしばらく振りに口を開く

「…地上にも、少数ですが、現れたんです」

「…!」

「…数が少なかったんで、私たちだけでカタが付きましたが…。いたい、あれは何なんですか？」

「…まだ私たちも分かってないの。とりあえず今分かってる情報はここ新組織、いや…烈火瑠奈を狙っている、という事かな…」

「瑠奈を!？」

日向は驚いていたが、この反応は無理もなかった。あくまで瑠璃の推論ではあったが、今まで瑠奈自身を狙っていたのは闇本と紅だけだったからだ。瑠璃は続ける

「あくまで推論ではありますが…新組織を狙うにしては建物への直接攻撃が無いと言うこと、瑠奈さんが出陣すると瑠奈さんに攻撃が集中していること、そして瑠奈さんが今精霊を宿していると言うこと…以上を踏まえれば説明がつくんです」

「…道理は通ってる」

「でもその割に今、瑠奈の姿が見えないんだけど…」

「その瑠奈さんの行方を今探してるんですが…日向さん達もご存じないみたいですね？」

瑠璃の問いに日向は嘆息し

「そりゃあね…あの一件から瑠奈は地上には一回も姿を現していない…地下にいるんじゃないの？」

「つい先日から行方が分からないんです。新組織にいるみなさんは心当たりがないようですし、零さんたちは伝令精霊を出しましたがまだ帰還できないでしょうから…」

「…あくまで仮説ですが、いい？」

泉野が何かに気付いたようで、日向と瑠璃に話し始める

「…光さんは、以前瑠奈さんに精霊が宿った、と言っていましたよね？」

「はい、夢村さんが召喚したんですが…」

「…着眼点はそこです。なぜ夢村さんが召喚したにも関わらず、その精霊が瑠奈を選んだのか…それを考えましたか？」

「それは…その精霊が瑠奈さんと同じ”炎”の守護者だったからじゃないか？」

「…でも以前の瑠奈さんはそのような状態に陥ることなく能力を開放しています。勿論私たちも例外じゃありません。私たちにそのような精霊が宿っているというのも古文書には記載されていません」

「弥枝、そんな文書どこで読んでのさ!？」

日向があわてて突っ込むが、泉野は表情を変えず続ける

「…私はあなたのように常に動き回ってるわけではありません。空き時間には読書をしているのです。…脱線しました。…その精霊は何らかの目的で瑠奈に憑き、瑠奈にその目的を達成させるため、姿を眩ました…それが妥当でしょう」

泉野は、イフは自分に課された目的を達成するため同型の能力を持つ瑠奈に憑依し、目的を遂行しようとしていると考えたらしい。だ

がイフの人物像を知っている瑠璃は、泉野に反論する

「で、でもイフさんはそんな私利私欲のために瑠奈さんに憑いているとは到底思えないんですよ。私が見たイフさんは、好奇心、いや…むしろ好意を瑠奈さんに持っていると思うんです」

泉野は瑠璃が反論してくるとは思ってはおらず、多少狼狽しているが、それを払うかのようにメガネを外し答える

「…信じるのは大いに結構です、それが光さんのいいところですから。…ですが現実、裏切りなどは身近に潜んでいるものです。私たちは、いい例を見ているでしょう？」

「…イツキ先生のこと？」

日向が確認をしていたが、新組織のメンバーはその人物につらい目に遭わされていた。宝冥寺逸姫、瑠奈の高校時代の担任である。その担任教師が龍を開放しているのだ

「…それは…」

瑠璃は表情を曇らせる。実体験である以上、正論を言っているのは泉野だった

「…とりあえず、他のメンバーの帰還を待ちましょう。それからでも遅くはないでしょう」

「ミルドクライン、封印の森」

「…なあ、この森、一本道じゃねえか」

『…おつかしいなあ…、昔はもつと森つぽかったのに…』

瑠奈はミルドクラインの封印の森に足を運んでいた。イフは以前にもここに来ていたらしいのだが、以前と構造が違うということで困惑していた。瑠奈はその状況に呆れていた

「おいおい…これじゃあ森でもなんでも無いだろ。ただの抜け道だ。とてもじゃないが人が住んでいるなんて…」

『で、でも確かに場所はここなの！私、前にも来てるし！』

「…疑問なんだが、精神体であるお前がどうやってここにくるんだ

？」

『一応私たちは精神体ではあるけど、肉体を借りることで一時的にはあるけど現実世界に出られる、それは瑠奈もわかっているでしょう？』

「ああ、だったら以前も人の体を借りていた時期があるんだな？」

『そりゃあね！能力者であれば誰でも憑依可能さ！…あの時も確か炎使いだっただけかな？』

「その時は何を話したんだよ？その長とやらとよ？」

瑠奈にとっては当然の疑問だった。瑠奈はその精霊の長の正体を知らなければ、能力を宿す精霊がいるのもイフが現れて初めて気づいたのだ

『大体話す内容は一つ、能力者の状況なんだ。能力者の数は天然に生まれたものは数が決まっているから、一つの能力者は今定員道理いるかの確認だよ。』

「…天然？どういうことだ。現在の地下には溢れかえるばかりの能力者がいるぞ？」

瑠奈はイフの今の発言に反応した。能力者の人数は精霊により調節されていた…？

『そうだね。今、地下には沢山の能力者がいるよ。…だけど、それが人口のものであれば私たちに入っていく余地はないんだ』

「人口だと？能力者を人工的に生み出すことも可能なのか？」

瑠奈は驚きのあまり声が大きくなる。イフは構わず続ける

『方法はわからない。正直人間のやることに興味はないよ。だけど遺伝子を操作したりしたらたまたまできちゃったんじゃない？』

「んな簡単に出来るわけないだろ？だっておかしいじゃねえか、手から火を出したり、水を発生させたり…」

『そんな疑問、もつと前に持つものじゃない？…瑠奈、貴方の能力は紛れもなく天然、それはウチが保証する』

「…何が言いたい」

『夢村：だっただけ？あの人の能力こそ、人口の力なんだよ』

「…は？」

瑠奈は呆気にとられていた。そんな話は聞いたこともなければ、実際に手の甲にも文字が…

「！」

『気付いたね。そう。本来能力には世界に存在しない元素は出ない。夢なんてまさにそう。…あの人は…』

『紛い物だ』

16話…知られざる真実？

「ミルドクライン・封印の森」

『紛い物だ』

「…！！」

『…この声…』

瑠奈はイフが目的地と定めていた封印の森へ足を踏み入れていた。ある程度進んだ場所で瑠奈とイフが話をしていると不意に声が聞こえていた。だが周りは見渡す限り森で人の気配はしなかった。瑠奈は刀を持ってきてないことを悔やみながらも、能力を解放する。それをイフが気付き驚く

『っ！？な、何をするつもりだよっ！？』

「…警戒するに越したことは無いだろ。…どうやら、あまり歓迎されてないようだしな」

瑠奈は先程から森がざわついていたことに気付いていたらしい。声の主はまた瑠奈とイフに語りかける

『…イフリータ、今回は随分と生氣に満ちた人間を連れてきたか』

『やつぱり…、うん！今回は自信があるよ！』

イフはその声の主と、まるで知人の様な会話をしていた。瑠奈は疑問に思い、イフに訪ねる

「イフ、どういう事だ？この声の主はお前と知り合いか？」

イフはその言葉に呆れ、答える

『…さっきまでの私の話、聞いてなかったの？この声の主は精霊の長だよ』

「へえ…長、ね…」

この声の主はどうやら精霊の長らしい。その長は状況を理解した瑠奈に語りかける

『イフリータから説明をされているようだな。我が精霊の長だ』

「…そうかい」

瑠奈は警戒を解かなかった。声しか聞こえないためどこから仕掛けられるか分からず、敵意も図りかねていたからだ

『瑠奈！？なんでそんな喧嘩腰…』

イフの心配をよそに、瑠奈は自嘲気味に笑いながら声の主に語りかけた

「おい、その精霊の長とやら！俺は貴様がどんだけ偉いか知らないが、声だけで俺を出迎えるとは、客人に対して失礼じゃねえのか？せめて貴様の方から名を名乗ったりはしないのか？」

その言葉は確実に精霊の長に喧嘩を売っていた。その言葉を放った事でイフはさらに慌てる

『んなっ…馬鹿瑠奈っ！！なんで長に喧嘩売ってんだようっ！！』

「いや、これが筋だろうと思ってな。…実際、全く来る内容を教えず俺をここに連れてきたお前も十分失礼なんだがな、イフ」

『んぐ…』

だがイフの心配は無駄だったかのようにならぬようにその声の主は笑い飛ばした
『はっはっはっ！おもしろい人間よ…、大概の人間なら我に恐れをなすんだが、お主は違うようだな！その落ち着きを見るに、随分な苦難を越えてきたと見えるな』

「まあな。まあ、その苦難も今となっては退屈しなくてすんだ1つの出来事に過ぎないんだがな。…で、礼儀は通すのか？」

『ふん、堅い奴よ…我の名は覇天^{はてん} 皇^{すめら}、イフリータの情報通り、精霊を束ねる長だ』

だがここで瑠奈は疑問を抱いた。イフは横文字の名前なのに、皇はどうやら横文字では無いようだった

「…？」

『疑問に思つのも無理は無いだろう。我も基本的には地下世界にいるのだ』

「…地下に？」

『常に精神体で世界の監視はキツくてな、時には生身の身体で徘徊

した方が楽なのだ』

「そんな理由でお前の様な得体の知れない奴にウロウロされても困るんだが…」

『はっはっ！確かにな！…さて、先程の話を続けるか』

「待ちやがれ。生身の身体があるならその姿で出てきて話をしろ。

…森と話すほど病んでねえからな」

瑠奈は霸天に姿を現すように要求した。イフはその時『精神体のウチと話してたら周りからは病んで空気と会話をしてるようにしか…』
と言っていたが瑠奈は無視をした。その要求に霸天は

『いいだろう』

『ち、ちよつとまつ…！？』

とだけいうと、森がざわつき、止んだ。先程の様なざわめきは全く起きなくなつた。ただ、イフが何か叫んだ気がした

「…？イフ？」

「待たせたな、”炎”の守護者」

「…！！？」

瑠奈は姿を見て驚いた。なんと霸天は女性だったのだ。髪は真っ白で襟足は腰当たりまで伸び、顔は凄く美人でスタイルも良かった。

…服装は何故か巫女服だったが、瑠奈は気にしないことにした

「女…か」

「そんなに我が女だった事が驚きか？イフリータも女だったし、そんなに驚くことでもないだろう」

「た、確かにそうだが…。ところで、お前イフに何かしたのか？」

「ああ、何かしたわけでは無いが我が実体化したときは各精霊はこの世界には出てこれなくなる。まあ、我がまた精神体になれば戻ってくるから安心せい。ほら、イフリータがお主に渡した石、輝いておろう？」

霸天に言われたように瑠奈は左腕につけていたブレスレットの石を見ると、いつもよりも輝いていた

「つまり、今はこの石の中で一休み、か」

「簡単にいうとそうだな。…では、先程の話をしようではないか」

「…夢村の力は紛い物、って話だな」

瑠奈と霸天は先程話していた話をし始める

「世界には能力は基本元素が絡む物しか能力にはなり得ない。…夢は人間の幻覚だ。本来それを操ることは能力では不可能なのだ」

「それは理解出来るが…だったら何故夢村の手の甲に夢の文字が浮かぶ？」

「最低でも我はあの様な力を地下にもたらした記憶は無い。我は神とは違うが、能力の創成は行っているからな、それくらいは分かる」
「…ちよつと待てよ、お前ら精霊はこの世界が生まれてからずっと存在しているのか？」

瑠奈はその疑問にぶち当たった。そうでないとな能力の存在の起源が分からなくなってしまうからだ

「まあ、我は最近生まれた存在だが、世界が生まれたころから精霊は、そして能力は存在していた」

「…まじかよ」

「我は歴史には興味は無いから今一歴史は分らんが、今度人間界の資料で調べてみるがいい。…そして、そのような異端の力は何故生まれているかも分かるう」

「…？」

霸天は言葉を濁した。瑠奈には今一意味は図りかねていたが、今聞きたいことはその話では無かったため追求はしなかった

「では何故、我はその単語に反応してお主に語りかけていると思う？」

「…さてな」

「そのような異端能力が我らの存在を消滅に追い込むのだ」

「！？」

瑠奈は耳を疑った。どうやら夢村等の存在が精霊を消してしまうらしいが、全然理屈が分からなかった。霸天は顔に悲壮感を漂わせていた

「初めの内は歓迎した。我が産み出していない力が生まれるのは我にとつては未知なる発見だったからな。だが…そのような力が現れはじめてから、我らの力が消え始めた」

「…意味がわからねえよ。何故そうなる」

「世界には能力を使うのに必要なエナジーがある。そのエナジーは我らの存在を維持するのにもとても重要なのだ」

「…そういう事か」

つまり紛い物と吐き捨てる意味は霸天達精霊に取ってマイナスの存在だったからだ

「…お前は…もしや…」

瑠奈の額に汗が伝う

「君は察しがいいな…。そうさ、我は我らの仲間を守るためにその異端能力者を排除する」

「…!!」

瑠奈はさらに汗が額を伝う。霸天が言う意味は夢村達を攻撃すると言ったことだった。そして霸天はさらに脅す一言を放つ

「それは君も例外ではない。…”闇”と”炎”の二重能力者…、ダブルマスター烈火瑠奈」

「…!!?」

そして霸天は一瞬の内に烈火の懐に飛び込み、胸に手を据える。そして…

「オヤスミ…」

「!はやいつ…!!?」

次の瞬間、瑠奈の身体は宙を舞った。衝撃波を放たれ、打ち上げられたのだ。そこにまた一瞬の内に霸天が回り込み…

「”ファーストコンタクト”」

「…っ!!」

空中に舞った瑠奈に光の剣を突き刺した。瑠奈は少し体勢を変え、なんとか肩を刺される形で済んだが、そのまま地面に叩きつけられ、地面と共に肩を突き刺され、その場を動けなくなった

「うあっ！！」

「ふふ…君は簡単には殺さない。君に今覚醒されては困るからね」
「…どういうっ…!？」

瑠奈は肩の剣を引き抜こうとするが、ただ肩口から出血が増すばかりだった。それを見ながら覇天はいたずらな笑みを浮かべながら答える

「殺すって事はつらいこと…だから。大丈夫、別に能力が使えないようにするだけだから」

「…能力者にとってはそれは死だ。お前にも分かっているだろ!!」

「…ふう、もうこれ以上は話す必要は無いでしょう。…黙りなさい」
そして瑠奈の頬にキスをする。すると瑠奈の全身が麻痺してしまい、瑠奈は動けなくなってしまった

「…があっ…！お前…この…!!」

「大丈夫、きつと君も解放してあげる。…それまで眠っていてね」
「…!？」

そして瑠奈は意識を失ってしまった。覇天はその場で寂しげな笑みを浮かべ、歩き出す

「…眩しい男だね…烈火瑠奈。だけど、私ももう退けない…引き金は引かれたの。生きるか、死ぬか…。私を止めたければ、覚醒することね」

そしてその場を立ち去る覇天。だがその後…意識の無い瑠奈の横の空間に光の穴が生まれ、そこから少女が地面に叩きつけられるように出てきた。…イフリータだった

「イタタタ…。あ、あれ！？私…肉体がある！？それに…瑠奈！？…とりあえず、まずは剣を…」

瑠奈の闘いの時代はまた、動き出したのだった…

17話：謁見

「新組織」

「…駄目だあ…見つからないよう」

「…すみません、発見出来ませんでした」

「ワリイな…見つからなかったわ」

「…ふむう…」

日向、泉野、風野が瑠奈搜索に向かったがことごとく外れ、瑠璃は悩んでいた。瑠奈は地下に襲撃する謎の機械兵に対抗するために無くてはならない戦力であり、また瑠璃に取って大事な人間であるからだ

「…何で姿を消したんでしょう、刀を持ってないって言うのも理解できないですし…」

今この場には瑠璃の他に常に付き添っていた今では軍師的立ち位置の夢村、瑠奈を搜索していた日向、泉野、風野が居た。他のメンバーにも瑠奈の搜索および周辺の警護を頼んでいるので今この場には居ないが十分な戦力が揃っていた

「瑠璃ちゃん、もう諦めたら？あいつの事だから死んでるって事は無いと思うわよ？」

夢村は少し疲れた顔で瑠璃に提案する。だが瑠璃は難しい表情のままその意見を却下する

「確かにそれでも問題はありませんが…やっぱり戦力は多い方がいいです。それに…」

「貴女にとっての心の支えでもあるしね？」

夢村がからかうように言うと瑠璃は顔を赤くしてうつむいてしまう。日向はその場を見かねたか1つ咳払いをする

「ともかくにも、これだけ探しても見つからない、手がかりも全く無いとなると正直らちがあかないよ。私たちは能力者だけど私や

弥枝は地下の皆と違って探知能力は皆無だし、風野の兄ちゃんの能力にも引つ掛からない。そして他のメンバーからの連絡もない…。だったらやっぱり、瑠奈自身が帰ってくるのを待つだけなんじゃ…」

「失礼」

日向が話している最中、不意にドアが空くとそこには天導が居た。

天導は瑠璃に

「瑠璃、客人が来てる。お前に面会したいそうだが？」

天導はどうやら瑠璃に会いたい人間を連れてきたらさい。瑠璃はその人物に心当たりは無かったが、天導の表情を見たところどうやら天導も知らない人間らしかった。瑠璃はその場から立ち上がり

「分かりました、向かいます。…どこに行ったらいいんです？」

「行くんだな？だったら案内するよ。…こっちだ」

そついい天導が部屋を後にすると同時に、瑠璃も部屋から天導を追うように出ていった…

「新組織、謁見の間」

「…」

とある女が、愛の巫女の登場を心待ちにしていた。…その女は、正直悩んでいた。先程、烈火瑠奈という男を退けた。だが自分の、仲間の存亡を救う目的のためにはいえ、あの男の目が焼き付いていた。…「止める」という、女と同じ仲間を想う、目のせいで

「…我は悩む必要など無い。我は…正しいのだ…」

「お待たせしました」

そこに瑠璃が現れる。…あの男が護るにすれば、あまりにも不釣り合いな女性のように霸天には見えた。瑠璃は笑顔で霸天と顔を合わせる

「私の名前は光瑠璃、地下の統治者…と言っんでしょうかね？…貴女の名前は？」

瑠璃は少し柔らかい雰囲気で話しかける。霸天はその雰囲気にたじ

るきながらも言葉を返す

「霸天 皇…」

「霸天さん…ですか、良い名前ですね？」

「…そうなのか？」

「はい、多分」

「…」

霸天にとっては瑠璃は眩しすぎた。森の中で淡々と生活していたせいもあるのか、瑠璃が生き生きしているように見えたのだ。…だが、霸天の心は揺らがない。何故なら仲間、そして自分の命がかかっているのだから

「…我…、あ、私は…瑠璃さんをお願いがぁつてきました」

「お願い…ですか？」

「はい…あの…」

そして霸天は、これから発生する闘いフラグをここで発生させる…

「貴女のような二重能力者…、さらに異端能力者の身柄を差し出しなさい。私の手で貴女達を葬ってあげる」

「…!？」

瑠璃と天導にめがけ霸天は衝撃波を飛ばした…

「封印の森」

「…っっ…」

「あ、目覚めた？」

その頃瑠璃はやっと意識を取り戻していた。瑠奈はイフが実体化していることに驚きはしたが、すぐに冷静になり、イフに現状を聞いた…だとすると、既に霸天は…

「うん…。何故か私、今実体化出来ちゃってるって言う理由もそれで辻褄が合うんだ」

「封印の森を抜けたら新組織に行くには苦労はしないだろうからな…だが、これはまずい…！」

瑠奈は直ぐに動こうと身体を起こす。そして直ぐに抜けようと歩を進めようとした瞬間、瑠奈の頬を矢がかすめて行った

「…！！」

「…いつのまに囲まれて…！？」

周りには武器を構えた人間が瑠奈とイフを包囲していた

「…まったく、意地でも出さないってか？ 覇天も俺を止める自信が無いと見えるな」

「んな悠長な事を…！」

そこにさらに矢が放たれる。だが瑠奈はそれを顔に刺さる前に掴んだ。それを見た兵は狼狽していた

「な、何だよ、瑠奈…そんな簡単に…」

イフが恐怖する中、瑠奈は冷たい笑みを浮かべ、矢を捨てる

「ふう…出来れば無闇に戦闘はしたくなかったが…こうなったなら仕方ねえな。悪いが今の俺は急いでんだ、通らせてもらうぜ…機械兵…！」

瑠奈は周りを囲んでるのは機械兵だと言うことに気付いていた。それを悟られた兵はさらに狼狽し、一体が瑠奈に斬りかかる。だが…

「瑠奈っ！」

「ぬるい、こんなんじゃ俺を捉えられてたまるかよ」

瑠奈はその剣をかわし、顔面に拳を叩き込む。瑠奈は同時に能力を解放したため兵の顔が吹き飛び、身体はその場に倒れた

「…！！」

イフはその姿を見て驚きを隠せない。自分が力を貸さずとも瑠奈は炎を100%…それ以上うまく扱っているからだ

「へっ…、俺自身でも驚きだ。この力…まるで自分自身じゃねえみたいだな。このまま突破する！イフ、ついてこい！」

「あ、ああ…うん！」

そうして瑠奈とイフは包囲を打開にかかるといった…

18話…劣勢

「封印の森、中心部」

「”暗黒拳”！！」

「ちえいあっ！！」

イフと瑠奈は新組織に向かった覇天を止める為に機械兵によって作り出された包囲網の突破を試みていた。だが機械兵は無尽蔵に現れ、次第に包囲網が狭まっているのが感じられた

「…ちいつ、こいつら、次から次へと…！！」

「瑠奈！これ以上戦うのはただの能力の浪費だよ！何か他に策を考えなくちゃ…！」

イフが言いたいことは瑠奈にも分かっていた。どのみち遅かれ早かれ覇天とは戦わなきゃならない、相容れない存在であり、今ここで力を使いすぎれば不利になる一方だと言うことは。だが包囲網に未だに亀裂が入らない今、瑠奈にとっては焦りが先行し余裕が無かった為こうするしかなかったのだ。无尽蔵に現れる機械兵、これを出るだけ楽な形で抜ける方法は…

「…空か…！」

「！？空？」

瑠奈は唐突にその言葉を口にする。イフはいまいち言葉の意味を分かてないのが瑠奈に伝わった為、すぐ瑠奈は説明を入れる

「さすがの機械兵も見ただけで陸戦型だ。空を飛ぶ仕様にはなっていない。だったら俺らが空を飛べばこの包囲網を抜けられる筈だ」

「でも空を飛ぶ手段はどうするのさ！？」

「…そこが、な」

「手段無いの！？じゃあなんで言ったのさ！」

「…何か策を見つけないきゃ、俺ら、最低でも俺は間違ひなく死ぬ。だったら1%でも確率があることを考えるさ。例えば…空から救援が来るとか、な」

「そんな事はまず無いよ！だって…」

「だって…なんだ？」

瑠奈はその言葉を言うのと口元を吊り上げる。イフが困惑し、瑠奈が見ていた方向に視線を向けると…

「ガルルウオオツ！！」

「…！！?!」

空から…翼が生えた女性が降ってきて、機械兵の一角に突っ込んだ。一部が一撃で壊され、機械兵の攻勢が止むとその女がこちらに歩いてきた

「…烈火、見つけた」

「ああ、ナイスタイミングだぜ…天鳳院！」

瑠奈はその女性を知っていた。地下闘技大会で同じチームにいた、天鳳院琉季だった

「…状況は？」

「思ったより敵の数が多い。そして今事は一刻を争う…出来ればここはこれ以上の戦闘は避けたい。だから…」

「空から突破…する？」

天鳳院は瑠奈が最後まで言わずとも言いたいことが分かるようだった。イフはその様子を見ていたが

「でも二人をいっぺんに運ぶのは無理なんじゃない？背中に乗るわけにも行かないんだし…」

「…うん。そう。だから、泉野って人からこれ、預かった。烈火、これに乗る」

天鳳院が淡々と話し、ポケットから何か板上の物を取り出した。そしてそれについてるボタンを押すと一瞬の内にスノーボードのような板に変わった

「…あいつ、知らぬ間に発明家になったのか？まあいい…とにかくこれに乗るのはいいが、使い方は…」

「…自分の力を推進力に、それだけらしい」

「…は？」

天鳳院は事も無げな発言をするが、あまりにも意味が分からず、首を捻った

「…じゃあ、私はこの娘と行くから」

「あ、ちよつ…まだ心の準備があああつ！？」

そして天鳳院はイフを抱き抱え飛び立った。そしてこの場は琉など機械兵のみとなった

「…一か、八か…。おもしれえ！行くぜ…！！」

そしてその板に乗る。すると急にホバリングが始まり、いつでもスタート出来るよう準備が整う

「バーニングイグル”豪炎鷹”！！飛べえええつ！！」

そして瑠奈の掛け声に呼応するようにその板は瑠奈の制御の元、新組織へ向けかつとんで行った…

〓新組織、謁見の間〓

「私たちの生き残りの為、貴女を含む異端能力者の引き渡しを要求します」

「…！」

「へえ…そうくるかい、困ったねえ…どうも」

瑠璃と天導を前に、霸天が高らかに宣言した”異端能力者狩り”は、瑠璃に動揺を与えるには十分過ぎた

「勿論冗談のつもりは一切無い。我には我の存在、我の仲間が存在が懸かっているのだ」

「だからと言って、私たちに身柄拘束の話を持ちかけられても…何が何だか…」

「貴女達が居ると、私たちはこの世から消える存在。私たちが存在し続けるには貴女達を消すしかない」

「消す、と言うことは僕らを殺す、と言う捉え方で間違いないかな？」

瑠璃に代わり、今度は天尊が霸天に問いかける。霸天はその問いを鼻で笑う

「無論、血を流さずに出来るなら、お前達的能力を抹消させる事も可能だ」

「…それを、私たちが許すとても？」

瑠璃が一気に敵意を向ける。霸天はその様子に笑顔で返す

「勿論、ありえないでしょう。だから、実力で消すだけ。…」インパクトハリケーン”」

「…!!」

霸天が急に瑠璃と天尊に向けて掌をかざし、そこから竜巻が発生し瑠璃と天尊を飲み込み、建物を破壊した。霸天は悲しみがこもった瞳で決意をする

「…全てを壊してでも、皆を守る…我は…守る！」

「封印の森上空」

「…!!」

「…どうしたんです？天鳳院さん…!？」

イフは天鳳院に抱えられながら封印の森を通過した直後、上から爆発音が聞こえてきた

「…聞こえたみたいだね。新組織、襲撃を受けてる。…急がなきゃ」

「…うん！…あれ？」

「…どうした、イフリータ？」

「…いや、何でもないです」

イフは身体に異変を感じながらも、天鳳院には黙り先に向かった…

「封印の森出口」

「のわあああつ!?!?」

瑠奈は天鳳院に貰った板で封印の森を脱したが、そのままコントロールを失い昇降エレベーター前で不時着した。そのまま板は壊れたが、瑠奈は奇跡的に無傷だった。瑠奈はすぐに身体のほこりを落とす

「…とにかく急ぐか…嫌な予感がする…」

そして瑠奈は昇降エレベーターで新組織がある第4階層へ向かう…

「第4階層、クラシックフィールド、昇降エレベーター前」

「…!!?!?!?…燃え…?!?!?」

第4階層に着いた瑠奈が見た新組織は既に変わり始めていた。建物の上半分が吹き飛び、燃え上がっていたのだ。そして眼前には機械兵が包囲していた。だが今の瑠奈にそれは見えていない

「…貴様等…殺される覚悟…出来てるなああああつ!?!?!?」

瑠奈が叫び、闇の力が解放される。そして闇の波動を生み出し機械兵を一蹴する

「…霸天…貴様あ…!!!」

一瞬で包囲を崩した瑠奈は勢いをそのままに新組織へ急行するのだ
つた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7024v/>

CHAOS ~ REMEMBERS ~

2011年11月7日10時05分発行